

5 Q.0 「自由に問うてよい」という提案に対し、どのような問いを立てるべきなのか、よくわかりません。自由といいつつ、ある程度質問される内容は予測できていると思われませんが、このような自由を与えられると、身動きがとれなくなってしまうので、どのように対処すべきか、アドバイスをお願いします。

10 A.0 どう反応するかも含めてみていますので、Q.0のようなことを書いてもらってもかまいませんが、どちらかという、そういうアドヴァイスを求めない学生のほうがいいかなあ・・・と思います。

15 Q.1 philosophiaは、賢明さをもって各々の学問をとらえていく過程でもあるというのか。

A.1 言ってよいと思います。

20 Q.2 philosophiaと他のphysicsなどとの関係は、philosophiaが他のものも含んでいるということであってますか？

A.2 一応あっています。そして、その上で、philosophiaには、他のものだけでなく、+ α として、sophiaを伴っている、ということです。

25 Q.3 先生はいくつの国の言葉を学ばれましたか。そのうち実用的に使用できるのはどれくらいでしょうか？ 哲学の対象が智というのは新鮮でした。私は哲学とは他（ママ、の？）学問とは異なり、研究対象を外からながめるのではなく、自己との関係においてとらえるから、対象に制限はなく、無尽だと思っていました。

30 A.3 前半については、実用というのが、私の場合、研究に必要な文献を読む、ということなので、日常会話のできないものがほとんどです（大体、古代ギリシア語やラテン語での会話は例外的な場面でしかほとんどないですから）。しかし、哲学・西洋哲学史を研究するためには、その人の専門が何であっても、最低、英・独・仏・ギリシア・ラテンの文献を読めなければ、偽物と言わなければなりません。私の学部、大学院時代の先生たちは、その意味で本物でした。後半は、Q.1, Q.2そして、Q.5にもかかわる問題です。言われていることは、近現代的な哲学の捉え方としてありえる見方ですから、そう考えてもらって結構です。しかし、古代ギリシアの人たちの哲学は、という、哲学以外の諸学問の対象と対比的に説明するために、哲学(philosophia)の対象としての智(sophia)ということを行いました。Q.1, Q.2への答からうかがえると思いますが、哲学(philosophia)=智(sophia)という側面もあります。しかし、この面を強調しすぎると、哲学をする自己(人間)が強調されて、哲学が扱う対象も無限だし、自己の内奥への探究も無限である、ということになって、特に後者の近世的な形態は、ニーチェのいう「認識論」という形をとって現れることになります。その点、古代ギリシアの哲学(philosophia)の対象としての智(sophia)というのは、自己(人間)の智に限定されない面があるので(勿論、人間的智と制限のない智は峻別されますが)、あえて、対象としての智(sophia)という突き放した言い方をしているのです。

40 Q.4 今回の授業で「大東亞戦争」「大日本帝國」を多用されてゐたが、先生の歴史観はどのやうなものでせうか。家永氏の著作の話もあり、先生がどのやうな歴史観をお持ちなのかわかりません。

45 A.4 歴史観といわれると難しいのですが、「大東亞戦争」「大日本帝國」と口走っても、「大東亞共栄圏」がよいとか「大日本帝國」に戻れ、と言っているわけではありません。

むしろ、私は名前は「あかい」ですが、思想的には「ピンク」くらいではないかと思っています。

50 Q.5 ニーチェが当時の哲学を消極的引っ込み思案なものだと主張した際に「人間的でありすぎた」(Allem das Menschliche, ママ)という言葉を用いたのは何故か疑問に思いました。消極主義の哲学であることとどういった関係なのでしょう。

A.5 Allem das Menschlicheは、vor Allem das Menschlicheですね。普通のドイツ語では、vor allemですが、ニーチェのこの文脈では、「人間的でありすぎる」ということ
55 の意味は、哲学の内容が人間の「認識論」中心になっているということ(例えば、カントの第一批判の分析論を思い出してみてください)で、そのことを消極主義と言っているのです。それに対して、ニーチェが名前を挙げている古代ギリシアの哲学者たちは、「認識論」よりも、「存在論」や宇宙論を展開していた、ということなのでしょう。

60 Q.6 学生の頃、なぜ西洋哲学を専攻しようと思ったのですか？

A.6 高校生の頃には、哲学をやろうと思っていたように記憶しています。これに関しては、『人文学へのいざない』(初版と第3版)に書きましたので、それを読んでください。なお、ここ(広島大学)で使われている、「西洋哲学」という言い方は、「哲学」と「西洋哲学史」に峻別した上で、かつ、両方を同時にやる、というのでなければならぬと思
65 います。

Q.7 アリストテレスの言っている「驚き」の説明をもう一度お願いします。

A.7 アリストテレスの『形而上学』A巻2章982b12sq. を読んでみてください。

70 Q.8 授業内で教材となるテキストは古代ギリシア哲学者が著したものが中心ですか。またはそれ以降の学者たちが古代ギリシア哲学を題材として扱った文章が中心でしょうか。

A.8 古代の人たちが書いたものを第一次的なテキストとして扱い、これが中心です。それらについて書かれた研究文献は第二次的な資料として扱います。

75 Q.9 授業は脱線もいいですが、もう少し・・・というか、もっと、本筋に力を入れて欲しいです。

A.9 申し訳ございません。しかし、私の人生そのものが、あるべき姿からの脱線のような気がしており、sine digressionem non vivere possum(脱線なしには生きられないの)です。

80 Q.10 プラトンの発音が東西で違うのに驚きました。所属する学校などで変わってくるのでしょうか？

A.10 人はその人が学んだ環境に影響されるようで、(少し大げさですが)学閥というか学派というか、その人が属する研究集団(?)によって、同じ対象を言っているはずなのに、用語や表現が違っていたりすることもあります。
85

Q.11 古代哲学とはいつまでなのでしょう。ギリシア哲学のみを指すのですか？

A.11 年表を参照してください。内容としては、ラテン語で書かれたローマ時代のものも含みます。

90

95 過去の授業のコメントを下記のURLから読むことができますので、参考にしてください。
home.hiroshima-u.ac.jp/akya59/lectures_index.shtml/

100 Q.-2. 私は学士論文で・・・ある分野について書こうと思っています。しかし、恥ずかしながら古典哲学はおろか近現代哲学の文献さえほとんど勉強していません。このままではやはりどこかで誤解が生じる危険性があると思われませんか？

A.-2. 哲学史を勉強しなければ、より正確には、テキストそのものを読まなければ、そもそも誤解さえ生じないでしょう。Q.0も参照してください。

105 Q.-1 ソクラテスに関する、ソクラテスに直接会ったことのある人の記述は脚色されているということでしたが、脚色されている部分としない部分はどう識別するのですか？

110 A.-1 例えば、プラトンに『ソクラテスの弁明』という作品がありますが、クセノポンにも同名の作品があります。裁判に出かけようとするソクラテスに対してダイモン（鬼神と訳す個人の守護霊のような存在）が制止しなかったというプラトンと2回も制止したというクセノポンの記述に違いがあります。そこで、どちらかが脚色しているか、両方とも脚色しているのではないかと疑うわけです。

115 Q.0 . . . 哲学史を勉強、そして研究する原因（理由）について、私の理解は、自分が考えていたこと（は）ほとんど先人がもう言ったので、先人の思想を見ないまま、新しいことは出せない。そう理解する（ので）よろしいでしょうか。正直に言えば、僕にとって哲学史の勉強は重要ですが、一番重要なのは、自分の経験そして思考ということです。 . . .

120 A.0 Q.-2とも関連しますが、自分の哲学が重要であることは同感です。その上で、学（学問）としての哲学を志すならば、自分以外の哲学者がどう考えているのかということ、つまり、哲学史を知らなければ、それは、ひとりよがりのいわば素人の勝手な哲学にすぎない、ということです。私は、職責上、素人であることが許されませんから、哲学史の研究と哲学そのものを並行してやらざるを得ないのです。もっとも、哲学史についての見解は哲学者の間でもいろいろあって、ヘーゲルのように、哲学史を哲学にしてしまったような人もいますが。

125 Q.1 アカデメイア閉館にはどのような意味があったのか、くわしく知りたいです。（参考文献などあれば教えてください）

130 A.1 従来の歴史では、キリスト教が公認されたローマ帝国により、ギリシア哲学という異教徒的な哲学を研究教育するアカデメイアは、ユスティニアヌスの勅令によって529年に閉鎖された、ということになっています。が、この時期のローマ帝国の勅令はそれほど効力がなく、講義をすることを禁じられただけで、研究や著作は行なわれ、その後もしばらくは組織として存続したようです。日本語では、廣川洋一『プラトンの学園アカデメイア』（講談社学術文庫、単行本もあり）を読んでください。

135 Q.2 「質問することについて質問する」という文に意味はありますか。古代にも言語哲学のようなものはありますか。

A.2 あるでしょう。見方によりますが、プラトンの『クラテュロス』は、一種の言語哲学を含んでいると思います。

- Q.3 極く極く初歩的な入門書を教えていただければ有り難いです。
- 140 A.3 とくどき紹介する参考文献をどれでも手に取ってみてください。講義内容も書物も受け取り手次第なので、常に100パーセント理解できるとは思わないほうが無難です。むづかしいかもしれませんが、今期授業で扱う範囲に関しては、廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』（講談社学術文庫）があります。
- 145 Q.4 . . . 左翼、右翼の話だと思うのですが、違いがよくわからないので説明お願いします。また、哲学とはどのような関わりがあるのでしょうか。
- A.4 まず、自分で、「左翼」「右翼」を調べてみてください（フランス革命時の議会の座席に由来するらしいです）。多義的で、定義しないで使うとそれこそ誤解を招くことばです。一応、現状肯定派、保守派の「右寄り」に対して、現状打破、変革指向派のつもりで自分を「左寄り」と表現しました。世界を解釈するだけで、世界を変えないような哲学はだめだ！とマルクス主義者に批判されそうですが、まず、哲学史上の基本的な文献も正確に読めていないようでは、変えるべき世界の現状もわかっていないのではないかと思います。
- 150 Q.5 カントなどの近現代哲学者が認識論に重きを置いていたのは、古代ギリシア哲学者がしてきたように、自身で知り得ない存在や宇宙などというものに言及するのを避けたから、ということですか。 . . . (中略) . . . 認識論を消極的としたニーチェにとって、積極的な哲学とは第一哲学や存在論ということでしょうか? . . . (後略)
- 155 A.5 前半も後半もほぼそういう理解でよいと思いますが、ニーチェ自身は、なんだか文句言いの評論家になってしまっているように思うのは、私がニーチェを理解できないからでしょうか。
- 160 Q.6 l. 76「→詩人、歴史家などは? . . .」について。l. 48「哲学形成の歴史は、学問全体の形成の歴史であると言える」とあるように、天体や歴史等を含め、全て哲学と呼んでよいという解釈をされていると思うので、アテナイで学問に専念していた人間は皆、哲学者というレッテルをはってもさしつかえないのではないのでしょうか?
- 165 A.6 まだ、授業で扱っていない箇所についての質問ですが、天文学だけとか歴史だけとかやっているのは哲学ではなくて、その時代に存在する全ての学問分野を視野に入れていなければ哲学とは言えない、ということです。
- 170 Q.7 プリントの「古代ギリシアの哲学者の系譜」の中で、賢者（ソポイ）と哲学者（ピロソポイ）と分けられているのですが、両者の違いは何なのですか?
- Q.7' Thalesから始まったと言われている「哲学者」たちは、最初は、当然、自分たちが「哲学者」であり「哲学している」という自覚はないのであって、その状態からいつ、学の体系として「哲学」が意識され、今日「哲学者」とされている人々が、自らをその人生の中で「哲学者である自分」と自覚し「哲学すること」をそのなりわいとしたのかが気になりました。
- 175 A.7 古代においてすでに（プリントでは正体不明のディオゲネス・ラエルティオス）、賢者（ソポイ）と哲学者（ピロソポイ）が区別されていて、賢者（ソポイ）のほうが、より古く、その思想が文献ではよく知られていないほとんど伝説的な人たちです。しかし、アリストテレスの区分では、タレースは、哲学者（ピロソポイ）に分類されるでしょう。哲学者（ピロソポイ）であるかどうかのMerkmal（徴表）は、例えば、自然現象を神話的に何らかの神の仕業である、というように考えず、自然科学的に人間の理性で理解できる説明をしようとする点にあります。このことは、Q.7' の質問に関連しますが、神話的に語らな

い、という点で、この人たちは、自分たちが、神話的に語る人たちとは一線を画することを自覚していたと思わざるをえませんから、自分たちを「ピロソポイ」の名で呼んでいなくても、後世のアリストテレスから見れば、すでに「哲学者」であり、「哲学している」といってもよい状態に達しています。さて、Q.7' については、こちらから逆に質問したことがたくさんあります。「最初は、当然、自分たちが「哲学者」であり「哲学している」という自覚はないのであって」ということは何を根拠にそう言えるのですか。また、最後の方に、「「哲学すること」をそのなりわいとした」と言っていますが、生業（なりわい）が収入のある職業だとしたら、それは近世の18世紀以降の大学の教師をやっている哲学者からのことで、それ以前は、「哲学」に限って言えば、本来、収入のある職業ではなかったのです。哲学者は、収入とは関係なく哲学し、他に収入源をもっていなければ、哲学できなかつた、ともいえるでしょう。この点で、報酬を要求するソフィストは、本来の哲学者ではありません。

200 Q.8 人間同士についての問題より先に自然哲学が主流であったことは自分にとって意外なことなのですが、自然哲学が盛んだった頃にもきっと人間のことを考えていた人がたくさんいると思います。

205 Q.8' 自然哲学の聯中から何故ソフィストやソクラテスの如き人間の問題に關する聯中が生じるのか、あるいは時代が移るのか、疑問に思ったが、多分最後の説明からすると、自然哲学とはいへ、その中に人間の問題に關する部分が包含されてをり、そこを強調する一派が生じる、といふことなのでせうか。

A.8 Q.8もQ.8'も、その通りです。この後、授業で言及するように、この教科書的な哲学史の記述は、アリストテレスの見方を通してのものだったということが言えます。

210 Q.9 ソフィストらが派閥を作らず、自己完結と言える状態だったのは彼らの思想的なものだったのか、別の立場もしくは生活上のものかのどちらよりだと先生は思われますか。

215 Q.9' ソフィスト達の思想が学派や学閥になっていかなかったということについて考えられる理由や定説はあるのでしょうか。商売敵ということで口もききたくなかったのでしょうか。

220 A.9 ソフィストの活動は、ソクラテスの活動時期とほぼ重なっているのですが、彼らは、言論による説得の技術としての弁論術の重視と、価値判断に関する相対主義という点ではほぼ共通していると言えるかもしれませんが、哲学史的にはどういう位置づけをするべきかは大変難しい、というのは、彼らはそもそも哲学をやっているといっているのかどうか、という問題があります。政治的、軍事的、経済的に全ギリシアの中心的存在になってきたアテナイでは、単に家柄がよいとか富裕であるというだけでは、国家にとって有用な人物とはみなされなくなり、議会において説得力のある弁論をふるい、議会を主導できる人物が求められました。そのようなとき、主に、そのような弁論術を何でも教えると称する教師達（これがソフィスト）が、アテナイ以外から、アテナイへ集まってきました。しかし、やがてアテナイがそのような政治的に中心的存在でなくなると、弁論術の教師としてのソフィストも必要とされなくなり、ソフィスト業をしにアテナイへやってくる者もなくなりました、ということだと思えます。彼らは、個人プロダクションのようなもので、一人一人が独立して営業活動をしていました。彼らに、哲学的主張があれば、それに基づいて学派も出来る可能性もありますが、そうでもないのです。研究者によっては、「ソフィスト現象」とか「ソフィスト運動(Sophistic Movement)」と言う人もいます。しかし、確かに、哲学史では、ソクラテス、プラトン、アリストテレスらによるソフィスト的な詭弁の

論駁によって、ソフィストの否定的な面が取り上げられることが多いのですが、他方、W. Jaeger (ヴェルナー・イエーガー) の『バイディア(Paideia)』の中で取り上げられているように、ひとつの専門分野だけでなく、立派な市民として必要な教養を身につけるような、全人教育(enkyklospaideia)という観点から、人間を教育する、ということ、農耕の比喻によって、土壌、種子、農夫の三者が、教育される者のおかれた環境、もって生まれた才能、教師の関係として捉えられ、劣悪な環境で、それほど才能のない者でも、どうやれば最大限の教育効果があるか、という考察を促した点に、ソフィスト達の功績があるという評価もあります。イエーガーは、この全人教育(enkyklospaideia)の伝統は、遠くルネサンス期にまでつながると見えています。

日本語で読める入門書(というより、研究書)は、田中美知太郎『ソフィスト』(講談社学術文庫、筑摩書房『田中美知太郎全集』第3巻にもあり)です。なお、W. Jaeger (ヴェルナー・イエーガー) の『バイディア(Paideia)』は、後期の私の授業(西洋古代中世哲学研究)で読んでいます。

Q.0 アリストテレスが自分以前の哲学者で一番認めている人は誰だと思いますか。

280 A.0 アリストテレスは直接、面識がないけれども、問答法（ディアレクティケー）の実践という点で、ソクラテスを、そして、正面からイデア論を批判しなけりばならなかつたという点で、実は、プラトンを認めざるをえなかつたと思います。

285 Q.1 哲学者は何でも知っている、学んでいるという誤解はよく耳にします、知人には哲学をどんな問いにも答え得る万能の学問であるとの誤解を受けたことがあります。哲学は問いに答える学問ではなく、問いを立てる学問だと思ひます。複雑に見える問題も、適した形で問いを立てることができれば、ある程度解決への道筋や糸口を見立てることが出来るものだと思います。哲学はそのような形で問題解決に寄与する学問で、それこそ哲学の力だと思ひました。

290 A.1 なるほど。そこで、逆に質問したいのですが、おっしゃるように、適した形で問いを立てることが出来るためには、どのような訓練をすればよいか、または、どのようなことを学べばよいのでしょうか。例えば、アリストテレスの『トピカ』や中世の disputationes（討論集）は、それぞれの時代に考えられていた議論の論拠集であり、問いのサンプル集であると思ひます。哲学がどんな問題も扱うことが出来る（答えることが出来る、ではありません）ということ、アリストテレスは、問答法（ディアレクティケー）
295 もその点で同じである、として、『形而上学』『巻や『トピカ』で言及しているの、参考になるかも知れません。もうひとつ、別の観点なのですが、シェリングが『学問論』の中で、要約していうと、哲学は大学の中で（シェリング当時のように）哲学部の中ではなくて、「芸術（諸学芸）の学部(collegium artium)」に属するべきである、というようなことを言っているのが、かなり以前から、気になっています。これは、哲学が何かを創る、
300 創造する、という主張なのだと思ひ推測しています。

Q.2 哲学者たちは、哲学者であるとともに数学者や物理学者であり、宇宙論などを示してきましたが、先生は学生時代、数学や物理学なども多く学んできたのですか？

305 A.2 大学1～2年のころの受講科目を調べてみると、自然科学系を最低12単位とらなければならなかつたのですが、数学が7.5単位、物理と化学をあわせて6単位のように、数物系に偏っていてよくないですね。なお、論理学は、学部でも院でも取りました。

310 Q.3 哲学者は古来、それだけで飯を食っていけるような者ではなく、他の職業や財産などがなくてはどうにもならなかつたとのことですが、現代でも哲学者にパトロンがついていたりするのでしょうか？

A.3 例えば、カッシーラーは、大学の先生をしていましたが、それとは別に、某お金持ちに研究の便宜をはかってもらっているの、それは一種のパトロンがついていた、と言え
るかも知れません。

315 Q.4 賢者とは何をした人たちなのでしょう。

A.4 賢者（ソポイ）というのは、職業や役職ではなく、「賢い人、知者」という意味ですから、たしかに、何をしたかわかりませんね。ソロンの場合は、今風にいえば、政治家ですね。

320 Q.5 タレースに始まる自然哲学者達は「世界は～で出来ている」とか「アルケーは～だ」などと主張していますが、科学的な裏付けが取れない当時の状況でどのように評価されて

いたのでしょうか。ある程度、体系立てられて筋が通っているなり説得力があれば評価されていたのでしょうか。

325 A.5 「評価」というのがどういう意味かわかりませんが、この問題（自然について）に関心のある人々によって議論され、その内容が継承されてきた（文字になって伝えられている）という事実が、その答になっていませんか。

Q.6 アリストテレスによる「哲学者」の分類は、ある意味で自身の考え方に似た人を取りあげただけであったのに、その分類が現在まで残っているみたいなものなんでしょうか。

330 A.6 「ある意味で自身の考え方に似た」という部分は、「アリストテレスの四原因の考え方によって分類可能な」というように理解すれば、その通りです。

Q.7 ソフィストは、現在の英語で詭弁家という意味が定着しているし、ソクラテスにやりこめられるゴルギアスのように真の意味の賢者というイメージが無く、私の中でソフィスト=エセ哲学者の印象が強いのですが、本当の意味でのソフィストの位置づけはどのようであったのでしょうか。

335 A.7 何らかの哲学上の説や立場をもっている、という意味では、哲学者ではない、と言えるかもしれませんが（相対主義や教育観などはたしかにあります）。その意味で、哲学史上での位置づけは難しいと思います。ソクラテスの立場を引き立てる論敵としては実に効果的ですが、．．是非、田中美知太郎『ソフィスト』（講談社学術文庫、筑摩書房『田中美知太郎全集』第3巻にもあり）を読んでみてください。

Q.8 質料因かつ形相因である、ということはあるうのですか。

345 A.8 よい質問です。アリストテレスの四原因の考え方では、同じ次元というか、同じ観点から見ると、同じものが同時に、質料因かつ形相因である、ということはありません。が、しかし、四原因の考え方は、ある意味で、相対的に観点をかえて見ることもできるので、同じものが、ある観点から見ると、質料因であるが、別の観点から見ると形相因である、ということはある得ます。アリストテレスは、『形而上学』2巻で、「ノエーテー・ヒューレー」ということを言っていますが、例えば、これが、ある観点から見ると、質料因であるが、別の観点から見ると形相因である例になるかと思います。

Q.9 ホメロス以来の「人間がいかに生きるべきか」という問題についての考察の展開に内的必然性はないとしても、そうした問いが連続した何らかの社会的背景は考えられるか。

355 A.9 「個の発見」ということがひとつの重要な転機になるとは思います。社会的背景を学問的に論じる資格は自分にはないと思いますので、スネルの『精神の発見』に譲ります。

Q.10 講義を聞（ママ、聴）いていると、アリストテレスがタレスを最初の哲学者とし、プラトンは全く言及していなかったということから、学問としての「哲学」や「哲学者」というカテゴリーにあまり意味はない気がしました。でもその曖昧さは、古代ギリシアに限定的で、4/17のコメントにもあったように、「哲学者」と自覚する人間が登場したのは、確かに報酬を得るようになった近（現）代以降という気がしました。

360 A.10 質問というか、感想というか、仰ることの意味がよくわからないのですが、前半は、アリストテレスによる、学問としての「哲学」や「哲学者」という分類の仕方には意味がない、ということでしょうか。その活動や思索の内容は異なっている、プラトンもアリストテレスも自分が、ピロソピアー（哲学）に従事している、という自覚は、彼らが「ピロソピアー」という言葉を使って発言していることから、強烈に感じられますが。

370 Q.0 アリストテレスの影響が後世に与えた影響はとてつもないものがありますが、強い影響が長く続いた理由には政治的背景もあるのでしょうか。

A.0 政治的背景というのをどう理解するかによりますが、アリストテレスの著作（実は講義録か講義ノート）は、論理学関係のもの（オルガノン）は、読み続けられていましたが、自然学や形而上学に関するものは、キリスト教の教えに抵触するので、初めは読むことが禁じられていました。しかし、アルベルトゥス・マグヌスやトマス（・アクィナス）らの註解によってキリスト教とも整合的な読み方をするようになると、その後は受け入れられるようになり（もちろん、反論する人も常にいますが）、例えば、300~400年後の17世紀になっても、デカルトがアリストテレスの『自然学』に反対している同じ時期に、大学ではアリストテレスの『自然学』が教えられている、という状況が生じています。政治的背景というよりも宗教的背景ということかもしれません。

Q.1 ブッダや孔子など、古代の人については、書物を残さなかった人のことをよく聞きますが、中世や近世にも書物はあるけど、実は思想の文字化に大きな抵抗があった人はいるのでしょうか。

385 A.1 まったく書いていない人の場合、書物がかいていないけれども、これこれの活動をした人がいた、ということを知りたくて、その存在自体がわかりませんが、本人が書くことを重視していなかったため、少しだけ書いたものがあって、それが残っている、という場合はなんとかその存在が知られます。そういう、少しだけ伝わっている人として、12-13世紀のアッシジの聖フランチェスコ、他人から書くように言われなかつたなかなか書かなかつたけれども、書くとすばらしい19世紀のラヴェッソン、日本では、狩野亨吉の名が浮かびます。

395 Q.2 ソクラテスが自身の著書を残さなかったのは、プラトンが主張するところの意味そのものであると思われる。敢えてそれをしたプラトン自身が、いかに優秀であったのかを自分自身で言ってしまうことは、なる程とは思いますが、ちょっと笑える話である。はたして、ソクラテスは本当に一冊も本を書かなかつたのでしょうか？

400 A.2 古来、伝えられている通りなら、書かなかつたのだと思います。そのほうがソクラテスらしく一貫していると思います。しかし、後世の偽作だと思われませんが、ソクラテスの手紙と称するものが若干伝えられています。それは、前回、紹介した、内山勝利先生の『哲学の初源へ ギリシア思想論集』、世界思想社(2002)に内山先生が訳していますので、読んでみてください。なお、プラトンの第7巻簡も、ほぼ、プラトン自身の考え方を表明しているため、本物らしいと考えられていますが、ひょっとすると、後世の偽作かもしれない、という可能性はあります。

405 書くことの意味、それをめぐる問題については、文献紹介（その3）の26、27、28）を自分で繙いて考えてください。これは、この講義の主題からは逸れますが、これだけでレポートや卒論のテーマになる問題です。

Q.3 アリストテレス（ママ、プラトン？）の哲学へ（ママ、トル）の文章化の不完全だという考えは当時の文章の伝達能力や保存の限界も原因のひとつとなっていたか。

410 A.3 書かれたものが、書かれた後、どのように使われるか、ということを考えてみると書くことの意味がわかるかと思えます。時期や場所によって状況も異なるので、それも考慮する必要があるでしょう。

415 Q.4 プラトン『パイドロス』の2つのlogosはよく理解できました。先日後輩に手紙を書いたのですが、2年前に先輩に私が手紙をもらったときと同じように（今になってようやく理解できたので）、その内容を真に理解できるのは（本当には理解できないかもしれませんが）2年後ということになりますかね。

420 A.4 そんなもんですかね。これは、手紙という文字による伝達手段でなくても、直接、音声で語りかける講義でもありえることです。私が大学1年のときに受けた西洋史の岸田達也先生の口癖を思い出します。「私のこの講義は、1,2年生向けの教養科目であります、今この講義を聴いて諸君がすぐに分かるような講義ではありません。そこに文学部の助手、助教授クラスの者が座って聴いていても何ら差し支えない、諸君（1, 2年生）であれば、20年、30年後に、ようやく、そういうことであつたか、と分かるような、そういうレベルの講義であります」

425 Q.5 ものを書こうとして、自分の考えとのギャップを感じる、ということは、少し分かる気はしますが、それを鋭く感じながらも、多くの書物をプラトンが残した理由、書くことを続けた理由というものに興味があります。

430 A.6 *sibi scribere*（自分のために書くこと）という19世紀の古典文献学者V. Roseのものと伝えられることばがあります。プラトンにとっても、ひとつには、自分自身のために書く、自分の考えを整理しまとめるために書く、という役割はあったと思います。考え抜いて推敲に推敲を重ねる努力をしていた人のことばであればこそ、プラトンの第7巻のことばは重みがあるのです。最初から、文字を軽視して書くことへの努力をしなかった人の言葉とは違う、ということです。

435 なお、文献紹介（その3）の28）スレザークと29）ニーチェに共通している理解は、あらかじめ、文献によらずに、プラトン先生から直接口頭で教えを受けたことのある弟子達が、どういう手順や経緯で、ある考えに至ったのかを、あとから思い出すための手がかりをプラトンが書いた対話篇は与えてくれる、ということがあります。ですから、ある問題に対する答そのものは、対話篇には書かれていないのです。つまり、書物を読んで、それまで知らなかったことを何か学ぼうとか、知ろうとかいう人のためには書かれていないということになります。

445 Q.6 *to hou heneka*に関する説明の例として植物（花）をあげられた際、目的として「子孫をのこす」と仰ってましたが、私の理解では、植物そのものが、花になったり、果実をつけたりする「目的」をもって変化するものだと思っていました。子孫をのこすことに限らず、植物の成長全体が目的と考えていましたが、あくまで目的因は限定的なものなのでしょうか。それとも、目的が多様であることはそれほど重要なことではないのでしょうか。

450 A.6 「目的」のスパン、というか、射程距離をどこまでとるか、時間的な推移をどこまで視野に入れるか、という問題ですが、長目のスパンで見た場合と、すぐ目先の目的だけを視野に入れた場合の両方の議論が可能です。アリストテレスも、事例に応じて、長目と目先の目的と両方を扱っています。以前、テキスト上の用語の区別として、『ニコマコス倫理学』や『エウデモス倫理学』その他について、究極的な目的を *telos*（テロス）、短期的な目先の目的を *scopos*（スコポス）と言って区別しているのではないかと仮定して、テキストを調べてみたことがあります。この仮定があてはまる場合もありますが、そうでない場合も多くあるので、アリストテレスにおいては、用語上の区別が常にあるとは言えない、という結論にいたりました。

460

Q.6. 動因のうち、「これまで認識されていなかった対象が認識されるようになる」あるいは「これまで認識されていた対象が認識されなくなる」という変化は、対象そのものの変化とみるべきか、それとも人間の認識の変化とみるべきか。

465

A.6 「これまで認識されていなかった対象」を、例えば、人間に「認識させる」動因が、人間の外にあれば、少なくとも、「認識していなかった」状態から「認識している」状態へ人間の側に変化が生じています。が、その人間に「認識させる」動因であるものも、人間に「認識させる」という変化を生じていますから、人間に「認識させる」動因であるものが、「認識される」対象自体である場合は、対象そのものも変化していると言えます。ややこしいですね。

470

Q.7 コメントシートのQ.10に対する返答でアリストテレスとプラトンが哲学の現状を嘆いている節があると仰っていました。その中で上記のどちらかが哲学をする資格というものに書及していたと思います。．．(中略)．．質問と感想ですが、アリストテレスやプラトンは哲学をすることに資格や才能というものを見ていたのでしょうか。その資格や才能はどのようなものなのでしょう。もし彼らが資格や才能の存在を考えていたのなら、私は少し残念に思います。．．(中略)．．一つの学問としてその門戸は万人に開いて欲しいと身勝手にも思います。．．(後略)。

475

A.7 おっしゃることはもっともです。しかし、それぞれの主張がなされる状況と、そこで使われていることば(「哲学」と哲学にたずさわる者(哲学者))の意味を把握しておくことが、この議論には必要です。

480

まず、(アリストテレスではなく)プラトンですが、プラトンにとっては、「哲学」と哲学にたずさわっていると称する者の現状と、プラトンが理想と考える両者のあり方が考えられます。プラトンが理想とするのは(後に、現実には実現できないと知って次善の方策を考えます)、国家の守護者となるべき者たち(哲人王)なので、幼い時から資質も教育もきびしくチェックされて哲学を行ないます。これは誰にでも出来る哲学ではありません。しかし、現実にはそうなっていないので、次のように言われます。

485

「少なくとも、現在行なわれている間違いと、哲学にふりかかっている軽蔑とは、こうしたところから起こっているのだからね」とぼくは言った、「つまり、前にも言ったように、その資格もないような人々が哲学に手をつけているからなのだ。というのは、生まれのいかにわしい者たちがこれに手をつけてはならなかったのであって、正しい生まれの者たちにだけそれが許されるはずだったのだから」[Plato, *Resp.* VII, 535C5~8, 藤澤令夫訳『国家』7巻]

490

次に、現在、私たちにとっての「哲学」と哲学にたずさわる者の場合を考えると、先にも言及した、大淵和夫と鶴見俊輔(私は高校生の時からこの鶴見俊輔さんの本を読んで知らず知らずのうちに影響を受けているようです)の考え方が参考になります。彼らの考えでは、(現在大学で講義されているような)「哲学」は要らないが、世の中の誰でもが、哲学にたずさわる者になれるし、ならなければならない、ということになります。大淵さんも鶴見さんも大学の先生だったことはありますが、その活動は本来、社会の中での実践にあり、大学で実践哲学とか言っているだけの大学の先生など要らない、と言っている点に僕は高校生のころから、今思えば、はげしく同意していました(ハゲドウ、変な日本語ですね。当時はこういう表現はなかった)。現に「哲学」と名乗って大学で行なわれてい

500

505 る「哲学」は要らない、という意味で、誰もがそれぞれの生活の中で、それぞれの知識や経験に応じて行なう哲学は必要であり、また、可能であって、そういう意味での「哲学者」は必要だと言っています。そのためには、現在の大学の「哲学」やそういう大学の「哲学」をやっている連中はかえって邪魔になるので、要らない、と、わざと極端なことを言っているのであって、彼らもすぐに、大学の「哲学」がなくなる、とは思っていません。

510 それならば、現に大学で哲学の教員をしている自分としては、どういうスタンスをとるかが問われるところですが、私の考えはこうです。現在の分野名の「西洋哲学」は、はげしく不適切で、端的に「哲学」とするか、「哲学・西洋哲学史」とすべきだということは別の機会にすでに述べました。大淵さんと鶴見さんにはげしく同意した私としては、大学で哲学に関わる学問としては、（それを行なう者の哲学的立場とは切り離せないけれども）西洋哲学史、あるいは、哲学史の研究だけだと思います。過去や現在に哲学にたずさわった人（いわゆる哲学者）が何をどう考えたか、ということをも本人の発言・文献に直接基づいて、できるだけ明らかにして、直接、原典に接することの出来ない人たちだれでも、515 それらに触れることが出来るようにすること、同時に、これまでに哲学の専門家と称する人たちが書いた研究書、入門書、解説書、それに翻訳の類いで、明らかに、誤訳や不適切な解説、間違った理解をしている記述を摘発して、訂正すること、です。この学問としての西洋哲学史の研究は、ほとんど文献学の学殖と技術を必要としますから、できるだけ若い時から（日本では大学入学後）、最低でも英独仏希羅の外国語の読解力のトレーニングが必要です。それはだれにでも向いている修行ではないかもしれませんが（私が学部や大学院で教えを受けた先生方はみなこのトレーニングを積んだ人たちでしたが、このトレーニング積まないまま、哲学の先生になってしまっている人たちを何人も知っています）。525 それと同時に、哲学の問題そのものを、いわゆる大学での哲学を専門とする人たち以外の、他の人たちと同じく、自分の頭で考えること（これはだれにでもできるはずのことです）、これが必要です。この2つのことを自覚して区別した上で、両方、同時にやることをせず、自分の文章に哲学的内容がないことを、何か難しそうな専門用語や翻訳調のことでば粉飾して、哲学をやっているつもりになっている連中が多すぎます。

530 そして、大学では、学問としての西洋哲学史の研究ということを言いましたが、2つのこと（自分の頭で問題そのものを考えること、と哲学史の研究）のうち、前者、すなわち、自分の頭で問題そのものを考えることは、何も、大学でなくても（大学でもやるべきですが、大学だけでやることではない）、高校、中学、小学校、幼稚園や保育園、それに、学校に行っていないときにも、できることです。その時々自分が入手できる情報や素材を用いて、自分で問題を見出して、論理的に考えるトレーニングをすることです。それには、535 高校、中学、小学校で、哲学的にももの考えるトレーニングをする時間を組織的に作るのが効果的ですが、個人的に教員の工夫で行なわれているものを別にすると、そういうものは現状ではないと思います。大学でさえ、意図的にそういう授業はほとんど行なわれていないのではないですか。それに相当するものは、論理学や哲学や哲学史の演習の中で部分的に行なわれていればよいほうでしょう。先に名前を挙げた大淵さんは、大学の先生になる前には、高校でそういうことをしていたようですが、今、広島大学では、総合科学部や生物生産学部、それに、薬学部などで行なわれているPBLの授業がこれに近いところがあるかもしれません。しかし、これは、大学に入ってからやっているようでは遅いのであって、大学以前にすでにやろうと思えばできることです（もっとも、何でも気付いた時が一番早いのであって、気付いたときに始めるしかないのですが）。545

550

Q.8 アリストテレスの *ouk endechomenon kai allos echein* の説明をもう一度お願いします。

A.8 はい。詳細は、授業で。文字だけでは伝わらないかもしれませんから。

555

Q.9 ピュタゴラス派からすれば、「数」が全ての構成要素であって、かつ質料であることについて、餘りよく解りません。

A.9 アリストテレスが見るところでは、ピュタゴラス派の「数」は、全てのものの構成要素、つまり、素材(ということは質料)であるので、質料だ、ということになるのです。

560

あくまでも、アリストテレスから見てですが、「数」は形相ではなくて、質料である、というところがポイントです。ただし、ピュタゴラス派がこれを聞いたら、納得するかどうかはわかりません。たぶん、違うというんじゃないでしょうか。

565

Q.10 アリストテレスは「第一哲学」を「対象が必然的である」学問としましたが、少し疑問に思いました。数学と異なり、答えがたった1つとは言い切れないですし、求め方も哲学者ごとにちがっていると思います。アリストテレスは、何をもち「対象が必然的である」としたのでしょうか？

570

A.10 アリストテレスの分類は、あくまでも、アリストテレス自身にとっての学問の分類ですから、アリストテレスの「第一哲学」は「対象が必然的である」学問です。質問者は、

575

「哲学者ごとにちがっている」と言っていますが、アリストテレスからみれば、「ちがっている」連中は、間違っているので、「哲学者ごとにちがっている」ようにみえるだけで、その連中は哲学者とは認められない、ということです。アリストテレスにおいては、

「(今あるのとは違う)他の仕方ではありえない(つまり、必然的な)」対象のモデルとしては、数学・幾何学が考えられています。第一哲学(存在論、神学(キリスト教ではない、アリストテレスの考える不動の動者、思惟の思惟としての神を考察するテオロギ

ケー)の対象も、他の連中があれこれ違ったことを言っている、それは全部不完全だったり、間違っていて、アリストテレスが考える通り、「(今あるのとは違う)他の仕方ではありえない(つまり、必然的な)」対象である、というわけです。これに賛成するにも、

反対するにも、少なくとも、『形而上学』第6,12巻、『ニコマコス倫理学』第6巻、それに『分析論後書』第1巻を読んだ上でないと、説得力がありません。もちろん、勝手な

580

議論をするのは自由ですが、それは学問的には意味がありませんし、時間の無駄です。

585

590

Q.0

A.0

600 Q.1 「タレスが日食を予言する」とありますが、どのような方法で予言したのでしょうか。

Q.1-2 タレスが日食を予言したとのことですが、どのような理論と背景に行ったのか気になりました。

Q.1-3タレスは社会的にみてどのような存在だったのでしょうか。何かの職業についていたのでしょうか。やはり分かっていないのですか。

605 Q.1-4タレスは、どのようにして日食を予言したのでしょうか。数学者でもあったようなので天文学にも精通していたのでしょうか。また、昔の哲学者には哲学者であると同時に数学者や医者でもある人が多いような気がするのですが、何か理由はあるのでしょうか。先生の考えを聞きたいです。

610 A.1 タレスの日食予測の計算方法はわかっていないようです。エジプト人の天文学の方法に詳しくあったらしいので、それを利用したと考えられています（私はその具体的内容に興味がないので、詳しく知りたければ、天文学の歴史を自分で調べてください）。いわゆる哲学だけやっている哲学者は、ヨーロッパでは、18世紀以降の大学の先生のイメージで、それ以前は、政治や専門的な技術に精通していたり、そもそも、生活のためにはたらく必要がない身分だったりする人たちが、人間の（人類の）知的活動（いわゆる学問）全体にかかわる考察を行っていたのが、哲学（知への愛）ということだったのではないですか。

615 Q.2 大学での「哲学」が要らないというのには私も納得してしまいました。上手くその理由が説明できずに残念です。（Q.7への回答、528行辺りでふとアラン・ソーカルが思い浮かびました）

620 Q.2' 授業で専門用語などを学習して哲学をやっているつもりの人が多いというのは、本来哲学とは自分の頭の中で考える作業だと思うのでなるほどなと思いました。しかし、学問をする上では、昔の人の考え方や論理を理解して、まず同じフィールドに立ってから自分の考えをその上に構築していかなければいけないと思います。

625 A.2 Q.2' の後半で言われていることが哲学史の研究になるわけです。が、これに結構、誤訳や学力不足からくる勘違いなどむちゃくちゃなものが多いのです。ソーカルの場合は、わざとやっているわけですが、本人はまじめに書いているのでしょうか、書いている本人が本当にわかっているのか、というのがあります。

Q.3 タレスからはじまる哲学者（賢者）たちはアルケーは何であるかをつきとめようとしたのですが、彼らがアルケーにこだわる理由は何でしょうか。宗教的な考えも含まれているのでしょうか。

630 A.3 この世界が何からできているのか、とか、その元のもの何か？という問いは、根源的な問いであって、タレスからはじまる哲学者（賢者）たちもそういう問いを発したということは間違いないかもしれませんが、それは、あくまでも、アリストテレスの立場から見てのことであって、もし、タレス本人に尋ねる機会があれば、タレス自身はアルケーをそんなに気にしていなかった、と言うかもしれません。というのは、アルケーにこだわっているのは、タレスらではなくて、タレスらの説を批判的に紹介しているアリストテレスだからです。

635 Q.4 「アルケー=動かす力をもつもの」(I. 433), 「プシューケー=ものを動かす性質のもの」(I. 439)の両者の違いがよくわかりません。これまで、アルケー=万物の根源で、プシューケー=魂という単純な訳語で理解していたせいかもしれませんが、プシューケーは人間だけでなく、万物に備わっているもの、という解釈で大丈夫でしょうか。

640 A.4 大丈夫です。その通りです。単純・固定的な訳語で理解しないで、その都度、発話者（この場合は、タレス）が言おうとしている意図を察する力が必要です。私たちが、自分の論文を書くときには、自分の使う用語は、定義に従って、できるだけ一義的に使うべきですが、哲学史上の過去の文献を読むときは、それが書かれた（あるいは発話された）状況を察して、意味を探りながら読む頭のやわらかさ、というか、センスというか、そういうものが重要です。

645 Q.5 . . . (前巻) . . . 人にはそれぞれ能力がありますが、哲学するためには、やはり、非凡人でなければならないように思いました。

650 A.5 そう思われたのなら、ちょっと、残念です。というのは、「人にはそれぞれ能力がありますが」と言われていますが、そのそれぞれの能力に応じた仕方哲学することは可能であり、最終的には、誰にでも分かる（「分かる」にも、レベルに違いやそれぞれの分かり方があるでしょうが）哲学でなければ哲学でない、誰にでも分かる哲学でなければ要らない、というのが、大淵さんや鶴見さんらの立場で、私のはげしく同意したのは、まさにその点だからです。実際、前回紹介した（文献紹介 その3）、30）思想の科学研究会編、1975、増補改訂『哲学・論理用語辞典』、三一書房（現行の版の一つ前までの版）は、当時、定時制高校の先生をしていた大淵さんが、各項目の出来上がった原稿を、自分の生徒である高校生に読んでもらって、わからないところがないように書き直して出来た辞典なのです。まえがきにこうあります。

660 この辞典では、わかりやすさを第一とし、多くの実例や用例をあげて説明してあります。そして、出来上がった原稿を、高校初年級の人たちに読んでもらい、わかるまで書き直しました。

Q.6 ……論理的に考えることをトレーニングをすることです。について、簡単に質問したいです。所謂、哲学（の）訓練（或いは哲学思考の勉強？）は先生にとって論証的に考えるトレーニングをすることだけだと理解してよろしいでしょうか。

665 A.6 哲学の訓練としては、1)哲学史の研究成果に基づいて、過去や現在に実際に行なわれた（行なわれている）思考の実例を知ること、と2)自分や他人が設定した問題そのものを自分で考えるトレーニングをすることの2つが必要だと思います。

Q.7 質問への解答に関する質問で申し訳ないですが、補足資料の36行目、実践的学や制作的学は医学や大工の技術体系だと思えます。この学として認められるものの中に芸術は含まれるのでしょうか。芸術というのは、アリストテレスにとって、学問の対象となる分野だったのでしょ

670 か。A.7 これも、よい質問ですが、実は、アリストテレスの哲学をどう解釈するかという微妙な問題です。というのは、アリストテレスの学問分類の場合、実践にかかわる学も、制作にかかわる学も、学であるかぎりには、現代の言い方では、理論（アリストテレスの言葉では、実践とも制作とも区別される観想に相当する）であって、技術とは厳密には区別されるからです。従って、医学も医術としては、医学・生理学・生物学という観想的（理論的）学に基づいた一種の技術であって（医学は学であるけれども）、医術は技術であって学ではない。しかも、観想的（理論的）な医学であり、医術である、ということです。そうすると、医術という実践的なもの（技術）なのではないか？と反問するかもしれませんが、アリストテレスが、学問の対象のあり方に基づいて分類する際の「観想」「実践」「制作」の「実践」と、質問者が医学は「実践」的、というときの「実践」は意味が違います。アリストテレスのいう「実践」は、確かに、「行為にかかわる」という意味ですが、それだけならば、「観想的」な学を実行するのも、制作行為をするのも、ある意味で「学を実行する」行為、すなわち、実践であり、制作という行為の実践ということになりますが、アリストテレスは、この意味で「実践」と言っていない。そうではなくて、「今あるのは違う他のあり方でもあり得る対象にかかわる」行為という意味で「実践」と言っています。同じように、現在の我々のいう「芸術」も、芸術の制作行為は、それぞれの対象に即した制作技術を必要としますが、その制作行為は、学ではありません。アリストテレスが学の分類としてあげている「制作」は、「芸術理論」であり、「美学」であり、その前提となる「芸術史の知識」なのです。これらは、現在の我々の言い方では、「制作」よりもむしろ、（アリストテレスとは違う意味で）「理論（観想）」的なものです。

690 Q.8 書物を書く場合に、それが何を意図しているのかが、古代と近現代では異なるという点が興味深く感じられた。これに読み手の性質なども加わると、より複雑な問題になっていくように思われた。

695 A.8 某分野での卒論発表会で、プラトンの対話篇がどういう性質のものであるのかを知らない人が、「プラトンには著作があるんですか？」と質問して、とんちんかんなやりとりをしていたのを思い出します。西洋の古代・中世・近現代とそれぞれの時期に文字で書かれたものがどういう意図で書かれたものかを知っておくことが必要なのに、このことに気づいていない人が多いと思います。

705 Q.0 ((第5回の)A.3への回答について)では、なぜアリストテレスはアルケーにこだわっていたのでしょうか。アリストテレスはタレスの「アルケーは水だ」ということに対して否判(ママ, 批判?)していますが、アリストテレス自身はアルケーを何だととらえていたのでしょうか。

710 A.0 アルケーというのは、「はじめのもの, 始原, 始源, 始元」なので、原因(アイティアー)とも言われます。アリストテレスは、デモクリトスらの原子論を知っていますが、もし、この世界が何からできているかという質料因を問われれば、プラトンと同じく、四大(地水火風)と答えるでしょう。しかし、これらを究極の構成要素だと言っているわけではなく、巨視的あるいは微視的にみた場合の説明のために有効な要素だと言っただけのことです。というのは、アリストテレスは、この質料因の他に、何によって変化するのかという始動因、何を指しているのかという目的因、そして、そもそも形相因のほうに関心があるので、そのメカニズムのほうに関心があって、構成要素は物質レヴェルでは何かということは、ある意味でどうでもよいのかもしれませんが。「アリストテレスはアルケーにこだわっていた」というように見えるのは、アルケー、すなわち、ここでは質料因にしか気付いていない連中を批判するため、ということでしょう。

720 Q.1 思想の科学研究会編『哲学論理用語辞典』は面白さうだと思ひますが、矢張時代を感じる部分も多くあるやうに感じます。第一、「思想の科学」といふ會の名前からして、あの当時のあり様が脳裏に浮かぶやうです。私は哲学も思想も歴史學も科学だと思つてゐないし、さういふ時代も終わったと信じてゐますが、この點どうお考へでせうか。

725 A.1 「さういふ時代」とはどのような時代をさしているのか確認する必要がありますが、終わるどころか、今こそようやく、というか、まさに「思想の科学研究会」があるべき姿になった時代だと思ひます。というのは、この辞典の初版と第二版までは、大学で哲学を学び、大学の先生でもあった鶴見さんや大淵さんが主導して作り、さらに市井三郎、上山春平、竹尾治一郎(前回渡したコピーをご覧下さい)先生たちが協力しているのですが、現行の第三版を作ったメンバーには、大学の哲学の先生は一人もいませんし、そもそも、哲学を専門にしている人がいません。ただ、鶴見さんが顧問的に協力しているだけです。つまり、大学の哲学の専門家によらない普通の人たちによる哲学の勉強会であり、最初に、大淵さんや鶴見さんが目指したものが実現していると言えます(うらやましい)。問題は、「科学」という日本語の意味です。これは、ギリシア語のepisteme、ラテン語のscientiaの訳語としての、science(サイエンス, 英), science(シアンス, 仏), Wissenschaft(ヴィッセンシャフト, 独), scienza(シエンツァ, 伊), wetenschappen(ウェーテンスハッペン, 蘭)などの日本語訳として、「学, 学知, 学問」という意味で用いられています。これは、私の「科学哲学・科学思想史」(後期)の受講者は、ああ、あの話か、とすぐわかると思ひますが、本来、「自然科学」「人文科学」「社会科学」などの「科学」だけを切り離して「科学」と言っていることと、19世紀以降の「自然科学」全盛期に「(科)学」の代表として、「自然科学」のことを、単に「科学」と言ったことから生じている現象であつて(今、世間で、どのように勘違いして使われていようとも)、本来、「科学」は「学, 学知, 学問」という意味であつて、その中に、「自然科学」「人文科学」「社会科学」などをすべて含む「学問」という意味でしかないのです。「思想の科学研究会」の「科学」もこの意味で用いられています。「思想の科学」という名称については、経済学者でトマス(・アクィナス)研究者の上田辰之助さんから提案された、と鶴見さんの証言があります(上田先生は、トマスの『神学大全』を讀んでいて、「思想の科学」という名称を思ひついた、ということです。ラテン語のscientiaを科学(つまり、学知・学問の意味)と訳したようです)。「科学」という日本語が、現にどのような意味で使われているかと、本来、どのような意味で、訳語として日本語に登場したかと調べてみて下さい。その意味のずれを知ることが必要です。

745 Q.2 タレスのプシューケーの考え方を見ていると、アニミズムのようなものを感じました。以前、アリストテレスかプラトンの授業のコメントシートで古代ギリシャの「神」について質問したところ1つの「神」のみが問題として扱われていると先生はおっしゃいました。今回のタレスのような「万有」の概念は神の問題とは切りはなされるのでしょうか?それとも時代や場所が異なっているので比較の対象にならないのでしょうか?

750 A.2 タレスはたしかにアニミズム的です。そして、1つの「神」のみが問題というのは、アリストテレスのことでしょう。タレスの場合は、資料が少なすぎて、神に関してはなんとも言えません。が、アリストテレスの神も含めて、次のQ.3で問われているのでそれを参照してください。

- 755 Q.3 古代ギリシア哲学の神とキリスト教伝統の神の区別について簡単に説明していただけますか。
A.3 ギリシアの場合、固有名をもって呼ばれる神々（複数）と、プラトンやアリストテレスらが、
名前なしに「神」（単数）や「神的なもの」という場合は区別する必要があります。プラトンの場合
は、「神々」（複数）の場合がありますが、アリストテレスの場合は、理論的に言って「神」（単数）
760 「神」は、世界を創造する、という点です。なお、ギリシアの中でも、アリストテレスの「神」（単
数）は、他と違って、この世界のすべてのものが、その「神」によって動かされる「不動の動者」で
ある、という点が特徴です。アリストテレスには、もうひとつ、認識という観点から、「思惟の思惟」
としての「神」ということがあります。これに関しては、『形而上学』第12巻を読んでください。
- 765 Q.4 教養科目の哲学Aで“哲学する”ということとは日常から逸脱した不気味な世界に行き、そこから日常を眺
めることから始まると教わりました・・・（後略）・・・
A.4 たぶん、古東先生のおっしゃりたいのは、普段、当たり前だと思っていることを、地球に来たエイリアン
が初めて見るように不思議に思ってなんでだろうと、探究してみよ、ということですね。
- 770 Q.5 根源的なものを想定する際に、タレスは具体的な事物（水）を提示し、アナクシマンドロスはそ
うしなかったが、両者のこうした違いを理論づけることは可能か。
A.5 「違いを理論づける」というのは、「両者が違うのは何故かを説明する」ということでしょう
か。タレスは、生命の根源としての「水」に着目したのに対して、アナクシマンドロスは、「水」
775 では説明できないものに気付いて、すべてを説明できるようにするために、「水」ではなく「無限な
もの（ト・アペイロン）」を根源的なものとした、と考えると、次に、アナクシメネスは、根源的な
ものを、「無限なもの（ト・アペイロン）」から再び、より具体的な「空気」に引き戻したのは、ア
ナクシマンドロスの「無限なもの（ト・アペイロン）」では、抽象的すぎて、説明ができないことが
780 であると考えたから、ということになるのでしょうか。しかし、彼ら3人は、たしかに、「水」「無限な
もの（ト・アペイロン）」「空気」と異なるものを根源的なものとしているけれども、それらは共通
して、世界の事物がそれらから生じ、それらへと戻って行くものであり、従って、それらは、ある意
味で「生きており」（生命原理）、在り続けている（存在し続けている）という意味で「神的なもの」
である、とみている点で軌を一にしている、ということのほうが重要なのではないのでしょうか。
- Q.6 タレスをはじめとした自然哲学者は、世界の法則や原理の説明を神話のような超越的なものに求めなかつ
785 た点に功績があると思うのですが、彼らは何か宗教的なものに対する信仰はもっていなかったのでしょうか。
A.6 タレスは、世界がどのように出来ているかを、ヘシオドスのように、神々の由来によって語る（神話、
宇宙生成物語）ことをせず、「水」に象徴されるものによって、説明することを試みた、という点がアリストテ
レスによっても評価されているわけですが、タレスは、同時に、「万物は神的なものに充ちている」とも考え
790 っていて、タレスにとっても、「神々」や「神的なもの」は認められるわけです。しかし、これは、具体的な名
前をもって呼ばれる神とは異なり、例えば、オルベウス教やいわゆるギリシア神話の神々に対するギリシア人の
もつ宗教的感情とは違うものなのではないか、と思います。
- Q.7 アナクシマンドロスが479行目で「それらのものは、時の定めるところに従って、互いに不正
の裁きを受け」と述べていますが、この「それらのもの（→無限なる原質？）」は複数種類があつて、
795 互いに裁きをしあう、というより、「無限なる原質」が変化し生成された「物質」が互いに裁きあつ
て（作用しあつて？）生滅していくと理解するのが正しいですか？
A.7 「無限なもの（ト・アペイロン）」つまり、ここでは、「無限なる原質」は、そのままでは、
まだ、「無規定で」具体的には何でもないのでありますが、実は、その内に、対立的な要素を含んでいて、
それは、暖と冷、湿と乾のような対立的なものであり（この湿と乾に着目したことが、タレスの
800 「水」を採用しなかった理由のひとつかもしれません）この対立するものが、「無規定で」具体的
には何でもないのでから分離して出て来ることによって、無限に多くの内容（多様性）をもつ世界が生
じる、というのがひとつの可能な解釈です。そこで、その場合、例えば、具体的には、昼と夜、夏と
冬、長雨と日照り（干ばつ）のような出来事は、火と水、熱と冷、湿と乾のような対立的な自然の力
805 が、一時的には、一方が勢力を増しても、いずれ時が経つと（時の定め）、衰えて、もう一方が勢力
を盛り返して、全体としてみると、均衡を保つ（正軌、裁き）というように読むこともできるでしょう。
その意味で、質問者の言っていることは、大体、あたっています。

810 Q.0 「思惟の思惟」の意味についても一度説明していただければ大変有り難いです。ミレトスの思想家たちが、自然について追求し神的なものをたずねようとしたのですが、ここに何となく「自然と一体になる生き方」と「自然を思考の対象として対立させる生き方」の変化が起こっているとも思いました。

A.0 前半は、確かに、文字通りの意味で「有り難い」ですね（自分で、アリストテレス『形而上学』12巻を読んでください）。後半は、なるほど、と思います。

815 Q.1 ヘラクレイトスは「魂にとって湿り気を帯びることは快楽あるいは死」と言っている。観想が至高のものとの考えなのか、本当は湿り気こそ良しとするのか？自分はとても湿った人間なのでこの言葉はなかなか深く感じられた。

820 A.1 この授業では、まだ、ヘラクレイトスを扱っていませんが、待ちきれないようですね（自分で勉強しているようで結構なことです）。ヘラクレイトスは、（何を言っているのか意味不明だ、という意味で）「暗い人（ホ・スコティノス）」とあだ名されていますが、ある事柄について、正反対の発言を残していることで知られています。だが、それがいい。ところで、ヘラクレイトスの場合、魂に関して、「乾」と「湿」については、「乾いた魂はこの上なく賢く、この上なくすぐれたもの」(Fr. 118)、「大人もひとたび酔えば、年端もゆかぬ子供に、連れていってもらうことになる、よろけながら、自分がどこへ行くのか知らぬままに。魂を湿らせたからだ」(Fr. 117)、「魂にとって水となることは死であり、水にとって土となることは死である。しかし土からは水が生まれ、水からは魂が生まれる」(Fr. 36)とっています。

830 Q.2 タレスやアナクシマンドロスは異なるものを根源的なものとしているが、共通点もある、ということですが、「神的なもの」というものがあまりよく分かりませんでした。

A.2 ギリシア人がいう「神的なもの」について言えることは、それが「不生不滅で永遠に在る」ということだけです。そもそも、「何であるか」はわかりません。だが、それがいい。

Q.3 機械論的自然観の中にもいくつかパターンがあるのでしょうか。

835 A.3 機械論 (mechanism, Mechanismus, mécanisme) は、目的論 (teleology, Teleologie, téléologie) に対して、世界の事象を、自然的必然的な因果関係によって説明し、基本的に意志の介入を許さない考え方なので、哲学史上では唯物論的な立場になって現れます。古代の原子論（デモクリトスら）や近世では、ホッブズ、スピノザ、ラ・メトリ、ドルバックなどです。しかし、世界の事象をすべて機械論だけで説明するのは、無理があると考える人たちは、機械論が適用されるのは、いわゆる自然界・物質的な世界だけで、超自然界、道徳界には、機械論は適用されず、目的論が適用されるとしました。カントがその例でしょう。そこで、機械論の通用する範囲をどこまでとするかによって、機械論的自然観にも程度の差が出て来ると思います（が、機械論が機械論として展開するのは、近世以降です）。

845 Q.4 死んでいる哲学というと悪いイメージを抱きますが、コリングウッドは近世初頭の哲学を批判していたのでしょうか。

A.4 批判的ではあると思います。だが、それがいい。

850 Q.5 タレスは学問的説明を行う（行なう）のに神を用いることを嫌っていたのであって、神を完全に排除したのではないという理解のしかたでいいのでしょうか。

A.5 よいと思います。

855 Q.6 高校生の頃、ある評論文が「○○○～を科学する」という題名でした。内容はおぼえていないのですが、きっと「自然科学」ではないほうの「科学」の意味なのですかね？

A.6 内容次第ですから、ひょっとすると、「自然科学する」という意味かもしれませんね。

860 Q.7 万有の持つ（もつ）「神的さ」は、「人間離れした」という意味は含んでいませんよね・・・？614～618あたりを読んでいたら、この「神的さ」は「世界の一般的な秩序では説明がつかないありさま」のように思えました。

A.7 「人間離れした」というのは、どういう意味ですか。Q.2に対して言ったように、「神的なもの」についてわかることは、「永遠に在る」ということだけです。この点では、「可滅的な」人間と比較すると、「人間離れした」と言えるかもしれませんが。

865 Q.8 ギリシャの哲学者、今回では、タレース、アナクシマンドロス、アナクシメネスらはそれぞれ万物の根源を主張していたが、彼らはそれら（動き）の中に神を見ていたということで正しいですか。

A.8 正しいですが、タレースらの考えている「神的なもの」と質問者が考えている「神」が同じものかどうか保証はありませんが。

870 Q.9 ホメロスらの神話的解釈を受けて、ミレトスの思想家たちの解釈が生まれたとすれば、前者の解釈には発展修正の可能性があるといえるのではないか。

875 A.9 ミレトスの思想家たちの哲学的な解釈は、ホメロスらの神話的解釈を引き継いだのではなくて、これを否定・拒否して、提出された新たなものであるということです。神話的解釈を発展させ修正したものが、ミレトスの思想家たちの哲学的な解釈である、と見なしたいならば、そう見るのは自由ですが、両者は根本的に違います。神話的解釈の発展修正の可能性をあえて考えれば、神の数を変えるとか、神の役割を修正するとかであれば、神話的解釈の発展修正と言えるでしょうが、それはあくまでも、神話的解釈の範囲内のことです。ミレトスの思想家たちの哲学的な解釈は、神話的解釈そのものをやめる、という点に見るべき点がある、と、例えば、アリストテレスは考えています。

880 Q.10 けふは「神」の話が多かったが、日本語ではユダヤキリスト教の単一神とギリシアの複数神が同じ「神」と譯されてある点に違和感があります。元の言葉も同じなのですか。

885 A.10 使用言語が違うので同じわけありませんが、ユダヤ教とキリスト教の『旧約聖書』は、ほとんどがヘブル語（ヘブライ語）で、「ヤフヴェー(yahve)」(実際に音読するときには、「アドナーイ(adonai)」と言い換える)、キリスト教の『新約聖書』はコイネー（ギリシア語）で、「セオス(theos, 単数)」,そして、古代ギリシア人は、ギリシア語で、「テオス(theos, 単数), テオイ(theoi, 複数), テイオン(theion, 単数)」と言います。つまり、『新約聖書』は、古代ギリシア人と同じ（と言っても、時代が下って口語化した）ギリシア語を使っているのです、それぞれが意味している内容は異なっても、言葉の上でつながりがあります。これらは、ラテン語に訳されると、単数なら、Deus, 複数なら、dei等になります。そして、現在、私たち（ユダヤ教徒でもキリスト教徒でも、古代ギリシア人でもない）が日本語で「神」と言うとき、それぞれが念頭においている「神」の内実は異なると思います。ただ、学問として（つまり、哲学や、宗教学、あるいは、宗教哲学として）扱う際に、その対象をどこまで知ることができるのかわからないのに、差し当たり、何らかの名称で呼ばざるを得ないので、「神」とか「神的なもの」（これが近現代になると「神」という表現自体をきらって、「超越的存在」とか「絶対的存在」と言っているわけで、何か特定の宗教の信仰の対象だと思ってもらっては困るのです。そういうこともあって、例えば、波多野精一はその『宗教哲学』の序で、「本書において著者は、宗教的体験において主体の対手をなすものを言表わすため、便宜上「神」という語を用いた」（波多野精一『宗教哲学序論・宗教哲学』、岩波文庫、2012年、p. 169）と書いています。

890

905 Q.0 けふは質問はございません。途中ねむたくなって困りました。

A.0 ねむたくなる講義をして申し訳ございません。ニーチェが次のように言っています。

Tiefe und Langweiligkeit. — Bei tiefen Menschen wie bei tiefen Brunnen dauerteslangebis Etwas, dasin sie fällt, ihren Grunderreicht. Die Zuschauer, welche gewöhnlich nicht lange genug warten, halten solche Menschen leicht für unbeweglich und hart — oder auch für langweilig. [Nietzsche, *Menschliches, Allzumenschliches II*, 2. Der Wanderer und sein Schatten, 328, KSA 2, S. 696.]

910

奥深さと退屈さ—深い泉の場合と同じように、奥深い人間のなかに何か落ちると、それが底に達するまで長い時間がかかる。はたの人間はふつう長くは待てない性分なので、とかくこういう人たちを無感動で冷酷だと—あるいは退屈だとも見なす。(中島義生訳、『人間的、あまりに人間的 II』, 第2部「漂泊者とその影」, 328.)

915

920 Q.1 「本当のことを言い当てたとしても」確かなことを知ることはできないし、知ることもできないとありますが、なら何をすれば人間はちゃんと「知」にたどりつけるのでしょうか。(半分愚知(ママ, 愚痴?)になっています。ごめんなさい)

A.1 どうやっても、人間はちゃんと「知」にたどりつけません。「ちゃんと」の意味次第ですが、「完全に」という意味ならば、残念ですが、何をしても、人間はちゃんと「知」にたどりつけません。だが、それがいい(のです)。人間は、ちゃんと「知」にたどりつけないことを知っていながら、あきらめずに、不完全でも、出来るかぎり、「知」を求める努力を怠ってはならない、ということなのです。Q.3を参照。

925

Q.2 15ページ660行目に、philosophus, philosophos とありますが、「philosophos」ではないのですか？

930

A.2 ないのです。-usでおわるphilosophusは、ラテン語で、-osでおわるphilosophosはギリシア語です。私の配付しているプリントの表記は、ラテン語、ローマナイズ(ラテナイズ)したギリシア語、ギリシア文字のギリシア語が混在していて申し訳ありません。ギリシア語をそのままラテナイズすれば、philosophosでよろしいが。なお、「」は、日本語の引用に用い、欧文を引用するときは、“philosophos”と書いてください。「」内に欧文がおかれるのは、「哲学者philosophos」とか「哲学者(philosophos)」のように、邦文に欧文が添えられるときです。

935

Q.3 クセノポネス(ママ, クセノパネス)について、「知」と「思惑」の区別について、もう少し分かりやすく説明していただきたいです。

940

A.3 人間にあるのは、そう思うだけで何の保証もない「思惑」だけだ、ということです。「知」と「思惑」の区別を峻別するギリシアの哲学者たちには、「知」は、人間には得られないものだという自覚があります。ですから、現在、私たちが普通に学問的に勉強してわかったと思っていることも、実はすべて「思惑」なのだ、と見なすことになるでしょう。人間は部分的には、「知」に与ることができるとしても、完全に「知る」ということはこの世では不可能だという自覚なのです。しかし、大切なのは、だからといって、「知」を求める努力は怠ってはならない、ということです。この態度は、パルメニデス、ソクラテス、プラトンに通じます。

945

950 Q.4 クセノポネス（ママ，クセノパネス）は，真実が分からないからといって，考えるのを放棄してはいけないといっているのですが，これはソクラテスの「無知の知」と似ているところがあるなと感じました。ソクラテスはクセノポネス（ママ，クセノパネス）の考えを参考にしたのでしょうか。

A.4 名前は知ってはいたでしょうが，ソクラテスへの直接の影響は，エレア派のパルメニデスからだろうと思います。

955 Q.5 クセノパネスはピュタゴラスから影響を受けているのでしょうか。

960 A.5 ピュタゴラス自身の学説（魂の不死と輪廻，数など）が，授業で述べること以外，ほとんど分かりませんから，内容的に影響の有無はなんとも言えませんが，伝承によると，奴隷として売られたクセノパネスは，ピュタゴラス派のパルメニスコスとオレスタダスによって解放された[D.L., IX, 19]と言われているので，関係はあったのかもしれませんが。

Q.6. Xenophanesは，万物の根源について何か言及しているのでしょうか。

965 A.6 万物の根源については，わずかな断片しかないのですが，土と水（大地と海）[Fr. 29]，言い換えれば，乾と湿を根源的な存在と見なしていたと推測できます。この点では，万物の根源を一元的にとらえたミレトス派からは思想的には後退しているようにも思えます。しかし，陸地で発見された海洋生物の化石を発見して，海と陸の相互変化を想定している[Fr. 33]とも考えられ，その点で自然科学的な思考もあると言えます。

970 Q.7 田中美知太郎『ソフィスト』を読んでみました。プラトンから御墨付きをもらう以前のソフィストたちはそれなりの知識や教養を身につけていたと思われ少なくとも私のような凡人は安易にゴルギアスやヒッピアス，プロディコスたちをプラトンと同じように“ソフィスト”と呼ぶべきでないと思いました。でも英語のテストではsophistは詭弁家と書きますし，自分の学年はsophomoreと書きますが。

975 A.7 参考となる書物を自分で読んでゆくことはよいことです。受講者全員が，今学期中に，各自が興味をもった書物（または論文でも）を何か1つは手にとって読むことをはげしく（変な日本語）希望します。さて，freshmen, sophomore, junior, seniorのことですが，17世紀にこの表現が英語に登場したとき（OEDによる），freshmenはよいとして，2年生以降は，Sophy Moores, Junioir Sophister, Senior Sophisterだったということと，sophomor eのmor eが，stupidという意味であることを知っていますか。Sophomor eもとのSophy Mooresは，前半は，ギリシア語のsophiaに由来することはよいとして，後半のMoor esは，ギリシア語のμωρός(moros)のことですから，英語で言えば，dullとか，stupidという意味です。前半のSophyの使われ方によりますが，「知恵に関しては愚者」という意味にもとれます。つまり，意味の重点は，前半ではなくて後半にあるとすれば，「馬鹿，愚か者」という意味が中心であるということです。その自覚が本人にあるのなら，985 ば，堂々と，sophomor eと名乗ることができるでしょう。私など，学年に関係なく，sophomoreかもしれません（万年2年生？）。

990

995

Q.0 来週やるであらう、ヘラクレイトスの「萬物流轉」について、平泉澄先生が『萬物流轉』といふ論考に於て言及してゐるのを思ひ出しました。平泉先生は、ヘラクレイトスの云へる如く、萬物は流轉してゐるのはバルティノン神殿などの廢墟を見れば分かるが、さうであれば、歴史は悲しみでしかない。併しその中に不易の準則が有る筈でそれを追ひ求めるのが國史學の神髓であると云ふのです。私は平泉學派につらなる一學徒として一つの眞理であると考へてゐます。

1000

A.0 その不易の準則がどのようなものであり、どのようにして我々に知られるものか、興味があります。たしかに、平泉先生は、戦後も活動されましたから、「不易の準則を追ひ求め続けられた」という感じがします。私も、流浪漂泊の果てに、今、仮(かりそめ)の居場所をここ、前身を廣島文理科大學の哲學研究室とする所にしていますが、週れば、ケーベル先生に、そこまでいかなくても、田中美知太郎先生や高田三郎先生の哲学・西洋哲学史の京都學派につらなる一學徒として、出陣、じゃなかった、周囲がどういふレヴェルの研究をしていようと、それに追隨・妥協することなく、原典による文献學的手法を蔑ろにせず、哲學史的研究に裏付けられた、Selbst-denken (自分の頭で考えること)の哲學を追ひ求めていきたいと思ひます。

1005

1010

Q.1 (1)ヘラクレイトスの「神」に対する考えを引きついで「ストア學派」が「キリスト教」に支持されたと考えるとよいですか？(2)対する「エピクロス學派」は「エピキュリアン」と呼ばれて「快樂主義」のように思われるところが有ります。誤解の産物なのですか？

1015

A.1 (1)よくありません。(2)誤解です。エピクロス自身の「ヘドネー(快)」は、「アタクシアー」すなわち、魂をかきみだされないうで、平靜にしていることですから、第三者からエピクロスを見ると、とても禁欲的な生活をしているように見えます。

1020

Q.2 コメントシートのA6について、クセノパネスの思想は萬物の根源を一元的にとらえたミレトス派からは思想的に後退しているとあります(前進ともとれるとも仰ってましたが)。一元論と二元論でいうと、例えば、カントは經驗論と合理論をうけて、現象界と叡智界という二元論を展開しますが、これを思想的後退とは言わないと思ひます。無論、クセノパネスらとカントは時代も大きく異なるし、扱っているものも違ふ。同じ状況、土俵で彼らを論じることではできませんし、先生がコメントシートで仰っているのが單純な一元論>二元論でないことも分かりますが、先生はどうお考えですか。

1025

1030

A.2 授業で言つたように、クセノパネス自身の断片から見る限り、クセノパネス自身は、ミレトス派ほどに、この世界を構成する根源的な要素をつきとめて、その根源的な要素から世界のありさまを原理的に説明する、ということに関心がなかつた(まったく無い訳ではないが)、という印象を受けます。この、世界を構成する根源的な要素を追求することに関しての、ちょっとした「やる気のなさ」というより「関心のなさ」を思想的後退、と表現したのであつて、根源的な要素が1つか2つかという、一元論と二元論そのものに関する評価ではありません。なお、カントについては、ボルツァーノ、ブレンターノと續く、カント批判に、少し惹かれます(詳細は、私の西洋中世哲学史概説の參看を乞う)。

1035

Q.3 クセノパネスは「神」を人間とは違ふ「知」を持った絶對的なものだとしていましたが、これは一神論だと考えました。ところで、クセノパネスは古代ギリシアの出身ですが、ギリシア神話に出て来る神々のことをどう思つていたと考えられるでしょうか。

A.3 断片資料で見たように、ギリシア神話に出て来る神々は、人間が人間に似せて思ひ描いた姿(anthropomorphism)にすぎない、という態度です。では、クセノパネスが考える

1040 神は、どういうものかという、Q.4への答のように言えます。

Q.4 クセノパネスの考える神が「全体として」行為するというのは、いかなる状況を考えればよいか。

1045 A.4 クセノパネスのいう神は、そもそも人間のような形をしていない筈なので、比喩的にせよ。人間の行為を表す表現では表現しきれないわけです。そこで、おそらく、仕方なく、クセノパネスが用いた表現が、「全体として(*oulos*)」という副詞的な表現になったのだと思います。この「全体として」というのは、ギリシア語の意味を字義通りに解すると、神は、「全体者として」行為する、ということなので、神=世界(宇宙)という発想です。ですから、「いかなる状況を考えればよいか」と言われても、おそらく、今、現にある世界や宇宙の状態が、まさに、神が「全体者として」行為する、ということなのだと思いません。

1055 Q.5 神の“anthropomorphic”に対する批判はおもしろいと思いました。I. 766の考えによれば、例えばエチオピア人はエチオピア人的思考を免れ得ないから、人間は他の人種との軋轢が生じてしまいやすいのではないかなと思いました。

A.5 人のいるところ、どこでもそういう軋轢が生じます。大学でも、土人、白人、クーリーが三つどもえでいがみ合っていますので、大学をやめて、今や本来の姿になって、大学とは関係なくなっている「思想の科学研究会」に入れてもらいたいところです。

1060 Q.6 anthropomorphicに対する批判の箇所をおもしろいと思いました。キリスト教だと、人は神に似せて造られているので、クセノファネス(ママ、クセノパネス)はもしも聖書を読んだら怒りそうですね。キリスト教や他の宗教もそうですが、「神」がストーリー性のあるものの中で描かれる場合は神の擬人(?)化が行われるのでしょうか。

1065 話は全然かわりますが、前ある牧師さんは最近のアフリカ人たちがキリストを黒人として描いているのをとても喜んでおられました。

A.6 その牧師さんからすれば、アフリカの人たちが、キリストを自分たちに身近なものとして思い描いていることを喜んだのでしょう。

1070 Q.7 ヘラクレイトスに対する言葉でルクレティウスの「その暗い言辭ゆえに明るい」というものが挙げられていましたが、これには分かりにくい言い回しを用いているだけで内容はそれ程ではないという皮肉も込められているのでしょうか。ヘラクレイトス自身の評価は高かったようですし、ただの嫉妬からの発言ですか。

1075 A.7 ヘラクレイトスのギリシア語の表現ではなくて、ルクレティウスのテキストの問題ですが、私がルクレティウスを読む限り、「分かりにくい言い回しを用いているだけで内容はそれ程ではないという皮肉」や嫉妬も感じられないので、この質問は新鮮でした。ひょっとすると、「皮肉」や「嫉妬」が込められているのかもしれませんが、私にはそう思えません。もともと、「皮肉」や「嫉妬」を感じ取れる人が、ルクレティウスのテキストを読まない、とわからないことなのかもしれません。ルクレティウスのラテン語は韻文なので、私は韻律を調べて意味を読みとるだけで精一杯なので、そこまでわかりませんでした。

1085

- 1090 Q.0 けふは質問はありません。ヘラクレイトスについて、平泉先生の論考を通してしか知らなかったのもっと深く知りたくなりました。レポートのテーマはこれにしたいと思ひます。
- A.0 ヘラクレイトスの「流転」思想に関する、平泉先生の情報源は何であったかを調べて、それを踏まえて、現在、私たちが、ヘラクレイトスの原典から知ることができる内容との比較をすれば、おもしろいかもしれません。
- 1095 Q.1 ヘラクレイトスの考えは、流転が重要なものだと思っておりましたが、相対立しているものの対立によって調和しているという世界観、また、火を四大元素の1つとして扱っている部分が興味深かったです。
- 1100 A.1 前半の「相対立しているものの対立による調和」は、授業で扱う重要な点です。ヘラクレイトスにとって、火は特別なものですが、これは、今期の授業では扱えないストア派への影響が考えられるという点でも重要です。この講義も、ずっと出席している人は別にして、欠席したり出席したりする人が、来たり来なかつたりすることで毎回ほぼ一定の調和のとれた出席者数を保っているの、欠席と出席の対立による調和、ということになるでしょうか（ならんって！）。
- 1105 Q.2 ヘラクレイトスの断片に「無知は隠すほうがいい」とありますが、先生はどのように理解されますか？私は「無知を隠す」には限界があるので、敢えて隠さずに教えるを請い、学問することで「無知」を減らすことを選びました。本当はギリシア語、ラテン語、ドイツ語もマスターすべきだと思うのですが、私にとってサンスクリット語の壁が厚すぎて、なかなか思うように読書も出来ていない悲しい状況です。
- 1110 A.2 質問の前半は、Fr. 95 ですが、註釈・研究書を書いている Marcovich も、“The implication of the saying is completely obscure.” (M. Marcovich, *Heraclitus*, Editio Maior, Merida, 1967, p.564) と言っていて、どういう文脈において解釈するか、とても難しい所です。研究資料を追加して、もう少し、授業で考えてみましょう。なお、後半の部分については、「マスター」というのがどの程度の運用能力のことかによりますが、
- 1115 マスターなどしなくてよろしいし、マスターなどできるものではありません。ことばの運用能力（聴く、話す、読む、書く）は、頭のよしあしと関係なく、動物的、生理的、身体的な慣れ、習慣であると思います（ただ、読む、書く、と最初に文法を間違いなく効率的に学ぶ、ということに関しては、論理的な思考力という意味で、頭を使いますが）。慣れるには、人によって異なるけれども、一定の時間が必要ですが、最初にことばを学ぶ
- 1120 ときのように、経験的に学ぶのでは時間がかかり過ぎますから、できるだけ短期間に集中して組織的、効率的に文法を学んでおき、後日、文献を読む必要が生じたら、一定の時間をかけて語彙を増やしていけばよいでしょう。大学を離れて、一人で文法を学ぼうとすると、時間や費用の点で不利ですから、その点で、大学に在学している、ということは、とりあえず、文法を学んでおく機会があるので、これを利用しない手は有りません。読みたい
- 1125 文献があれば、それが学習する強い動機になります。
- Q.3 今日授業で、p. 21, l. 930, Fr. 76 「火は土の死を生き、空気は火の死を生き、水は空気の死を生き、土は水の死を生きる」と聞いた時、私はエンペドクレスの四元素を思いつきました。ヘラクレイトスのこの考えはエンペドクレスに影響を及ぼしていたのでしょうか？
- 1130 A.3 水、土、火、空気は、四大と言って、ミレトスのタレースら以前から、ギリシア人に

1135 は知られていたものです（例えば、詩人のペレキュデス）。タレースやアナクシメネスは、これらのうちの一つに注目し、クセノパネスは、おそらく四つを想定し、ヘラクレイトスもエンペドクレスも四つに言及しているので、エンペドクレスが、特に、ヘラクレイトスから影響を受けたわけではないと思います。古代のギリシア人なら誰でももっている考え方で、強調点が違う、ということだろうと思います。後に見るように、エンペドクレスは、四大だけではなく、四大を動かす原理としての「愛」と「憎しみ（争い）」を導入したことのほうが注目すべきです。

1140 Q.4 ヘラクレイトスの「火」のとらえ方は理解（共感）しやすかったです。世界がいつも燃焼作用のように変化していることは、生きていの中で実感できる部分があります。しかし、変化があるのは分かりますが、その火はいつから燃え始めたのでしょうか。自然界で偶（まれ）に発生する自然発火のように、万物（火）も生じたのでしょうか。

1145 A.4 燃え始めはありません。ヘラクレイトスにとって、「この宇宙秩序（コスモス）は、いかなる神も、人も造ったものではけっしてない。それはつねにあったし、今もあるし、これからもあるだろう」（Fr. 30）ということですから、火も最初からあった、いや、そもそも、この宇宙に（存在し始めるという意味での）最初はなかったのです。

1150 Q.5 ヘラクレイトスの言明は確かに何を表現しているのか分かりにくかった。撞着表現以上のものを見出すのは難しかった。「火は土の死を～」で五行説を思い浮かべました。

A.5 五行説も古人の発想としてすごいものだと思います。相生の順は、木・火・土・金・水ですか。

1155 Q.6 「万物流転」と言うと、どことなく「諸行無常」と似た雰囲気を持っている気がしたのですが、根本に対立と調和という発想があったという点で異なっていることがわかった。まだはっきりと理解できているわけではないのですが、対立し相反する事物どうし（組み合わせ？）が「流転」することで、世界全体が調和し、安定している、ということの間違いないのでしょうか。

A.6 そういう理解でよいと思います。

1160 Q.7 配布資料のp. 22, l. 959の「弓やリュラのそれのように」の「それ」がどれを指すのかが微妙でした。弓やリュラの「相反発するものの調和」だとすれば、それぞれのどことどこが調和しているのでしょうか。弓は引き絞って緊張させ、手の（ママ、を）離して弛緩させ弓を（ママ、矢を？）放つので、緊張と弛感（ママ、緩）というふたつの相反するもの同士が弓のひとつの機能として「調和」しているということでしょうか。

1165 A.7 Fr. 51の読み方に関する質問ですね。「弓やリュラのそれのように」の「それ」は、「調和」のことで、「弓やリュラの場合のように」あるいは「弓やリュラのように」と訳すほうがよいかもしれません。授業で原典テキストを確認してみましょう。使用されていない状態で、置かれている弓や弦楽器を想像してください（弓に矢をつがえて使用する場面は想像しないでください）。静止しているように見えるけれども、弓の本体と弦（つる）、楽器の本体と弦（げん）は、静止して止まっているけれども、実は、引っ張り合う張力がはたらいっている、というただ、それだけのことです。

1175

- 1180 Q.0 今回は質問が思いつきませんでした。レポート、何を書こうか悩んでいます。ところでメ切はいつでしょうか？
A.0 いつなのでしょう？「もみじ」ではまだ成績登録期間が表示されていないのでわかりませんが、昨年度は7月下旬から8月上旬ころまででしたし、授業が8月4日までですから、レポートのメ切は、8月上旬くらいまででしょうか。あらためて授業で確認します。
- 1185 Q.1 前回の授業の質問をしても良いですか。 . . ? Fr.86に「正義は争いであり、 . . . 」とありますが、これは正と悪が世界にはいつも一定数あり、その対立があるからこそ「正義」（悪に打ち勝つもの）がある、という意味なのでしょう。
A.1 適切な指摘、質問をありがとうございます。Fr. 86と印刷してあるのは、Fr.80の間違いですので、訂正をお願いします。ここでは、「正義」（ディケー, dike）とだけ言われていて、質問にあるように、これの対概念としての「悪」ということは言われていません。「正義」を「悪に打ち勝つもの」とするのもひとつの可能な解かもしれませんが、ちょっと違うと思います。この断片はむしろ、対立・緊張関係にあるAとnon-Aがあって（これが正と悪とはかぎらない）、この対立・緊張関係そのものが、「正義」（ディケー; dike）と言われているのだと思います。そして、このことが、クセノパネスが、「必然」（Fr.1）と言っていたことに対する修正案のようにになっている、ということです。
- 1190 Q.2 今日扱ったF.101のところは、前先生が配っておられた論文の内容と関連がありますよね。ソクラテス以前の哲学にも、自分自身を探究する営みが記述されていることを知り、
1200 高校時代学んだ世界史Bの教科書の言っていたことが間違っていることに気付かされました。
A.2 高校の科目としては「倫理」ならともかく、「世界史」の中の文化史の記述では、量的に限界があるので、ソクラテス以前の哲学者については詳しく書けないのでしょう。
- 1205 Q.3 けふは質問はありません。広島へ来る前、五年間京都へおりましたが、東広島島の気候風土全てが好きになれません。京都が日々戀しいです。
A.3 私も、東広島へ来る前、12年間京都（左京区北白川）にいました。実家は神戸にあり、小学校、中学校、高校は神戸です。大学（学部）だけ名古屋にいました。以前、某先生から広島へ来たからには、ここに骨を埋めるつもりでやってもらわねば困る、と言われましたが、生憎、うちの代々の墓は、奈良市のど真ん中、近鉄奈良駅とJR奈良駅の中間、駅から徒歩数分の三条通りの某寺にあります。
- 1210 Q.4 あんがい、というか、やはりというか、ヘラクレイトスという人はかなり変わった人だったのだなあとお話を聞いていて思いました。これまでの授業で言われていたら申し訳ないのですが、ヘラクレイトスはロゴスをどのように考えていたのでしょうか。というのは、（理性と言ってよいのか分かりませんが）人間の思考の対象となりえるのか、はたまた直感的に促（ママ、捉）えられるものなのか、促（ママ、捉）えられたとしても全体は理解把握できないものなのか、ということですが、うまくイメージでかいたかったです。
1215 A.4 人間個人の魂にそなわっているロゴスと宇宙・世界のロゴス、いわゆるミクロコスモスとマクロコスモスという見方ですが、2つのレベルのロゴスがどのようにつながっているか、自己自身のロゴスを探究してゆくと、それが同時に、宇宙・世界のロゴスの解明につながる、ということの意味が問題です。
1220

1225 Q.5 「博識は覚識を教えない」という言葉は、現代教育の問題を語る上でも有用な考え方だと思った。国は「ゆとり教育」ではなく「さとり教育」を押し進めるべきだと思う。

A.5 「ゆとり教育」ではなく「さとり教育」、名言です。

1230 Q.6 四元素や五行などの発想が偶然発生的に似通ったのか、何らかの口伝えで同様の考えが変化していったのかのどちら側かは気になった。ただ、神などを世界の構造の頂点に立てないなら先に思いつくのは自然だったのかとも思う。

A.6 何らかの超越的存在による世界創造を前提としない世界観では、世界の構成要素として想定されるものは、どの地域でも、人間は同じような発想をしていた、という可能性があるということでしょうか。

1235 Q.7 ログスは魂が湿っているときには認識できないのでしょうか。

A.7 どうも、そのようですね。ヘラクレイトスは、魂が湿った状態よりも、乾いた状態のほうがより好ましいと考えていたようです。この或る意味で、比喩的な表現は、どういう理屈かは、比喩なのかどうかも含めて、検討の余地があります。

1240 Q.8 ソクラテス以前の哲学者を学んで来てクレースを始めとする哲学者は、天文学や自然科学者の分野においての知識が大部分であったと思うが、ヘラクレイトスに到（ママ、至）って、初めて私が今までイメージしていた「哲学」の概念とピッタリ来たように思います。ギリシャの万物流転の考えとインドの輪廻思想はどのように結びついているのか知りたかったです。ギリシャ神話の神々と、インドや日本の神々にも関係があるとしたらおもしろいと思います。

1245 A.8 インドとギリシアで独立に考えられた思想もあるでしょうが（この点は、日本独自のものと多くのインド～中国経由のものが日本にもあるように）、思想的な互いの交渉史はあったと考えられます。しかし、インドとギリシア双方の原典を読みこなせる学者でないと学問的に意味のある研究はなかなかむづかしい分野だと思います（複数の学者が協力する、という方法も考えられますが）。ちょっと古いですが、次のような本があります。

ジョージ・ウッドコック著（金倉圓照・塚本啓祥訳註）、『古代インドとギリシア文化』、1972年、平楽寺書店。

1255

1260

1265

Q.0 二次方程式の解は、(別紙参照)。

A.0 (別紙参照)。

1275 Q.1 ピュタゴラスはカリスマ性があったのかなと思いました。三平方の定理と「知る」こと／「信じる」ことの話で思ったのですが、普通数学の授業で習った定理や公式は、一度は自分で証明しているはずだと思います。導出過程を忘れたとしても、必ずしもただ信じているだけだとは言えないのではないのでしょうか。いつでも証明できるに越したことはないですが。(ベクトルを用いた証明は思いつきました)

1280 A.1 きびしいようですが、アリストテレス - トマス(・アクィナス)の言う「知る」／「信じる」の区別は、必要があればいつでも自分で証明できる状態を「知っている」というのであって、以前自分で証明したことがあるけれども、今は忘れている場合は、「信じている」だけだ、ということになります(現実態, 習得態, 可能態という観点が関係します)。Q.0を書いた人は、二次方程式の解をいつでも自分で導き出せるので、「知っている」ということができるでしょう。

1290 Q.2 今日のピタゴラス(ママ, ピュタゴラス)の話聞いて、どこかのエッセラピストやカルト教団の説法のように思えました。音楽に関する記述がありましたが、ピタゴラス(ママ, ピュタゴラス)は「音」や「音程」にだけ注目していたのでしょうか。それとも、曲など一定の長さのある楽曲の持つハーモニーにも神秘性を見出したのでしょうか。もしも後者の場合もあったなら、キリスト教の賛美歌などつながるところがあるのかもしれないと思いました。

1295 A.2 当時の楽曲自体は再構成の試みはなされていますが、いかんせん、資料が少なすぎて、推測の部分が多いように思います。数十年前にすでに、パニアグワというグループ?個人が、ローマ時代にまで遡る資料に基づいて(推測も加えて)再構成した古代ギリシアの音楽というLP(後に、CD化された)をリリースしましたが、とてもあやしいものです。

1300 Q.3 天体を音譜にあてはめて、それを演奏するのは、私的にとても斬新な発想でした。肉体は魂の墓場というのはプラトンの洞窟の比喩に似ていると思いました。

A.3 プラトンのほうが、ピュタゴラス派の影響を受けているのです。

Q.4 ピュタゴラスが整数比として発見した4度, 5度, 8度の音程は、当時すでに経験的に「美しい音程」として認識されていたのか。

A.4 推測ですが、おそらくそうなのだろうと思います。

1305

Q.5 数学でも有名なピュタゴラスほどの人の書物が残っておらず、存在していたのかどうかすら怪しいという話に驚いた。

A.5 ピュタゴラス個人は存在自体がなその人物なのです。

1310 Q.6 今日のピュタゴラスについての講義で、数学や音楽が魂の浄めという理由から発展していったと聞き、私が持っている「音楽家は賢者である」という漠然としたイメージが、あながち間違っていなかったと思いました。．．．．．(後略)

A.6 音楽と数学が通じるところがあるというのは、経験的にあってあたっていると思います。

1315

Q.7 8分の6拍子の存在意義がわかりません。4分の3拍子じゃダメなんですか。

A.7 ダメなんだと思います。

1320 Q.8 どうも芸術哲学は苦手です。音楽にせよ、絵画にせよ、建築にせよ。．．．楽譜も読め
ませんし。．．．教養科目の哲学A, B (柿木先生, 上野先生) では芸術をあつかうものが多
かったように思います。頭で思想を理解できても芸術を体で感じる事ができないので、
聞いていてつらい時があります。きっと私は損をしているのだと感じています。

1325 A.8 造形芸術にせよ、音楽にせよ、自分でもある程度、制作や演奏にたずさわっている人
の発言には耳をかたむける気がするのですが。．．．ですから、作曲家でもあるドビュッシー
やブーレーズの書いた論文やエッセイは読みますし、指揮者のフルトヴェングラーやワル
ターの書いたものも読みますが、例えば、アドルノの書いたものは、論文の審査などのた
めに、仕事として必要に迫られては読みますが(全集をもっている)、自分から進んで読
む気にはなれません。理論や批評、鑑賞の分業についての評価は難しいと思いますが、作
1330 曲家のストラヴィンスキーがハーヴァード大学に呼ばれて行なった連続講演(講義)は読
む価値があると思います。cf. I. Stravinsky, *Poetics of Music*, 1939-1940.

1335 Q.9 今レポートの作成に受け(に向け?を受け?)、資料集めをしてゐます。平泉先生の
ヘラクレイトスに関する知識は、出隆氏の論文及びドイツ留学の際に身に付けたものであ
らうといふところまで分ってきました。出氏は、少なくとも平泉先生とは思想を異にして
をり、自分の論文が皇國史觀の理論形成のもとになったとは、彼も苦笑ひしてゐたかもし
れませぬ。

A.9 なかなか興味深いことです。平泉先生のドイツ留学は、いつ、どこの大学で何を学ば
れたのか、教えていただきたいと思ひます。

1340 Q.10 哲学をやるうえで語学が大切だと常々おっしゃっているので、そうなのだろうと思
うようになりました。今日の『中国哲学を学ぶ人のために』の中で、諸先生方は思考力は
教えられるよりは自分で物事を考えているうちにつけていくのが良い、というようなこと
を主張されていましたが、赤井先生はどう思いますか? 思考力を養うためにしたほうが良
いトレーニングなどはあるのでしょうか。

1345 A.10 ズバリ答えます。あります。(なんだか、エセなんかみたいですね) それは、或
る外国語の初級文法を一通り学び終えた後に始める、原典を読む演習や講読の授業(や読
書会)に参加することです。一人で読んでもよいのですが、出来れば、先生や先輩など、
自分よりもそのテキストをよく知っている人に正してもらいながら読むほうが、独りよが
り、独り合点をさけることができ効果的です。そして、自分とは違う発想・考え方に触
1350 れて、それを理解する努力を継続することです。これは、日本語訳で読む場合には得られ
ない効果があります。それも、できれば、異なる言語、異なる傾向の哲学者のものを並行
して読むほうがよいでしょう。それは、一つの考え方だけに影響を受けないようにするた
めです。以前、この授業ではなく、西洋中世哲学史概説の2014年度第9回
(2014/06/10)へのコメントで紹介した、HumeとDescartesとKantを並行して読むトレ
1355 ニングがその例です。同じ言語でも、プラトンとアリストテレスを並行して読むとか、ア
ウグスティヌスとトマスを並行して読むとか、カントとヘーゲルを並行して読むほうがど
れか一つだけ読むよりよいと思ひます。ヤスバースも同じような趣旨のアドバイスをし
ています。

1360

1365 Q.0 ……ところで、先生もフォークソングの世代とお見受けしますが、好きな歌手はいますか？私は吉田拓郎とかかくや姫が好きです。

A.0 子供の頃から、いやでも聞こえてくるのは別にして、自分からは、クラシック以外は聴きません。歌手と言えば、ヴンダーリッヒが好きです。例外的に、ビートルズのLP、ピリー・ジョエルのLPは持っています。日本のものでは、能楽囃子のLPも。これは、年をとってから反省的に気付いたことですが、ドビュッシーが、グノーについて言っている中で、
1370 「芸術が大衆に無用のものであることを、みとめなければいけない。芸術は、さらにえらばれた階層---大衆よりしばしばもっとおろかである---の表現でもない。それは、運命的なかくれた力によって輝くべきときに輝きでる、潜在的な美のものだ」（平島正郎訳『ドビュッシー音楽論集』岩波文庫、p.257.）ということと、ヴァレリー（佐藤正彰訳「象徴主義の存在」より）が、「彼ら（象徴主義者）は大衆制服を軽蔑する」「更に彼らは最も高麗な階級を左右する力のある人々或いは集団の判断をも、同様にきっぱり忌避する」「そして徐々に自らの選ぶあの少数の公衆を自分に形成してゆく」と言っていることと通じるように思います。これは、音楽にせよ、文学にせよ、創作する立場からの発言ですが、同時代の大多数の人々に受けられるような作品はだめで、かといって、少数の権威ある学者や評論家にいいといわれるような作品もだめ、というのは、どちらも、既存の価値基準で評価
1380 できるものだからで、同時代の人には、少数の人にしか理解してもらえないような、既存の価値基準で評価できないような作品の創作を目指す、という態度の表明なのです。そうすると、作品を鑑賞するときにも、すでに評価の定まっているものはともかく、現代曲など、なんじゃこれは？というような、あまり聴かれない曲を好んで探し出して聴く、ということをやっていました。

1385 Q.1 原典を読む力が必要なること、良く分かりました。私は以前、小森義^出先生の論文を読んで、反面教師的に同じ結論に至ったことが有ります。先生は日本国憲法を帝国憲法第三十六(?)條に基づく天皇の緊急大権に依るものとし、京都學派と無効論者の缺點を克服した人ですが、彼の論文で支那の古典を引用する際、岩波文庫を用ゐて引いてゐるのには
1390 驚きました。分野が違ふにせよ、一度は原典にあたり、正確に引用できるやうにしたいものです。

A.1 全く仰る通りです。

1395 Q.2 「何をなすべきか、なすべきでないか」の問いに答えるものの解釈を見たいです。「対立」という概念は多くの文化圏で古くからあると思いますが、昼と夜の区別があることがその形成に大きな影響を与えているのではないかとふと思いました。

A.2 旧約聖書『創世記』も、ヘシオドスの『神統紀(テオゴニア)』も『仕事と日々(エルガ・カイ・ヘーメライ)』からもそう思えます。日没後、暗くなったのに明かりをつけて何かやるのは不自然なことで、日の出とともに起床し、暗くなったら寝るのがよいでしょう。ヨーロッパ中世の大学は今からすると早朝から講義をしていましたし、修道院では今でも午前2時や3時には活動を始めてますし、1920年代のドイツの大学でも、ハイデッガーの記録を読んでいると午前7時くらいから講義をしています。それを思うと、この授業が8時45分始まりというのは、おそいほうです。

1405 Q.3 1. 1231の「何をなすべきか、なすべきでないか」の問いに答えるものについて、(1)と(8)は理由が書かれているのに、それ以外に理由がないのはなぜでしょうか。

A.3 わかりません。ただ、きいてはいけないことをきいたな！と言われるのではないでしょ

うか。

1410 Q.4 「友のものは共通の財産」とありましたが、ドラえもん(?)のジャイアンが発言に少し似ていると思いました。彼の場合は、自分のものは他人に分け与えないので問題ですが、ピュタゴラスは数学というデジタルだけでは世界を説(明)しきれないと思ったから宗教というアナログなものにも興味を示したのでしょうか?

1415 A.4 後半の質問についてですが、よくわからないながら、後期のピュタゴラス派ではともかく、初期のピュタゴラスにおいては、数学的傾向と宗教的神秘主義的傾向は別々ではなく、同時に共存していたのだと思います。

1420 Q.5 バルメニデスの考えがプラトンのイデア論の素地になったということでした。なので現実世界が変化・生成していくのは、固定された「あるもの」の見え方による、というよりは「あるもの」界(イデア界みたいな)の投影が現実であると考えたほうが正しいのでしょうか。書いていて自分でもどう違うのか良く分からなくなってきました。...

1425 A.5 「あるもの」の見え方というのと、「あるもの」界の投影というのは、どう違うのでしょうか。同じことを言っているのですか。それなら、「あるもの」(真実在)とその現れ(現象)=現実の世界のふたつで説明できるのではないですか。

1430 Q.6 人々に真の在り方を理解するための能力があることが前提とされているとすれば、それらの人々のうち、バルメニデスが特に選ばれ、真理を伝えられたことはどのように説明されるか。

1435 A.6 バルメニデスが特に選ばれ、真理を伝えられたことは、バルメニデスあるいは人間の側からは何故か説明のしようはありません。まず、バルメニデス自身に、このような真理体験ともいべきものが起こってしまって、これをいかにして他の人に伝えるか、という点に苦心した結果(ヘシオドスらのやり方に従って)、書かれたのが、断片として残された詩だったというべきでしょう。強いて説明すれば、人々に真の在り方を理解するための能力があることが前提とされている、と言っても、誰もが100パーセントその能力を発揮しているわけではなく(むしろ、そんな能力はないに等しい人のほうが多い、というのが実際ではないでしょうか)、女神からみれば、人間の中で、バルメニデスが一番能力を発揮していたので、真理を見せても分かるだろうと、彼を選んだ、ということではないですか。未だに、バルメニデスの詩を読んでも、何のことかわからない、という連中がほとんどなのですから。

1440 Q.7 今日(2014.07.10)のQ.7で、4分の3拍子ジャダメなんですか、というのが有り、それで思いついたのですが、スーパーコンピューター「京」には「哲学すること」は出来るとお思いでしょうか?ヤスパースは哲学の本質は真理を所有することではなくて、真理を探究することで、途上にあることを意味すると言っているのです、演算中の「京」はまさに哲学しているとも言えるような気はしますが、超高速演算で「京」が「真理」にたどりついたとすれば、それは既に哲学では無く、「神」?!

1450 A.7 「哲学すること」の意味によるでしょう。何かの作業をしつつある進行中である、という点は共通しているように思います。しかし、「計算すること」「演算すること」だけなら、「~している」と言えるでしょうが、「問題を設定し」「計算の方法を決める」という、プログラムを書くことから自分でやらなければ、「哲学している」という状態からは遠い、と思います。

- 1455 Q.0 月曜日、京都へ行ってきましたが、かつて、京都に住んでゐたころは、市バス「出世稻荷前」の周辺に住んでゐましたが、今は出世稻荷自体が無くなり、「千本菰二條」にバス停の名前も變はつてゐます。隔世の感とはかういふことを云ふのでせうか。時間の話がけふの講義中ありましたが、また直接関係無いことを書いてしまひました。
- 1460 A.0 出世稻荷は秀吉の聚楽第のころから続くそうですが、経営（保守などの経費）のため、土地を売って、大原へ移転したようですね。
- Q.1 今日の「アキレウスと亀」や「矢」の説明は、ただ聞いていると納得したような気になりましたが、やっぱり考えると騙されている感じがして、何かモヤモヤが残りました。
- 1465 言語の大切さがとてもよくわかりました。
- A.1 エレアのゼノン、本気で、この世界（現象の世界）で、アキレウスは亀に追いつかないとか、飛んでいる矢は止まっているとか信じていたわけではないでしょう。師匠のバルメニデスの「在るものは在り、在らぬものは在らぬ」という主張に対して反論してくる論的に対して、一旦、この主張を認めないと、こういう不合理なことが出てきますよ、
- 1470 という議論なのです。
- Q.2 ギリシャ語の習い方、ユニークだと思いましたが、力がつきそうだととも思いました。．．．．．品詞の性別、複数形、格、語尾変化など、覚えることが多いですが、何か良い方法があればと思います。今期はサンスクリット語も履修していた。サンスクリット語にはギリシャ語と同じく主格や対格などがあるので、次に学ぶ機会があれば色分けと何も見ずに理解できるようになるまで読むというのを実践してみようと思います。
- 1475 A.2 自分にあう方法を工夫していろいろ試してみてください。
- Q.3 バルメニデスは、「ありかつあらぬということを知る」と言っていましたが、具体的なイメージができませんでした。具体例をあげるとすれば例えば何なのでしょう。
- 1480 A.3 この現実の生成消滅する世界がそれです。
- 1485
- 1490
- 1495

Q.0 最後の空マタ先生の講義（ママ，義）は大変興味深かったです。卒業論文が約半年後に控えているのですが、手軽な翻訳ばかりに頼りがちです。がんばってせめて英語の文献くらいは原文を読みたいと思います。

1505 A.0 英語だけと言わず、手に入る限り、何語で書かれていようとも、すべて原典で読んでください。（ソラマタカクゾウ ヨリ）

Q.1 「論文を書くために」は非常に面白く感じました。以前、小森義峯先生のことをコメントで書きましたが、國文やその他の専攻の人が支那の古典を引用する際、他の人も正確な引用が出来てゐないのでよく目にしました。逆に私が西洋や印度の文献を上手く引用できないのは、お互ひ様かもしれません。併し教員や學者が變な引用や譯をしてしまふのは笑ふほかありません。

1510 A.1 自分が入学してしまった大学の先生がそういうことをしているのに気付いたら、学生諸君としては、どうしようもないので、笑うしかないかもしれませんが、教員としてそういう人が同僚としていて、それも一人や二人でないことを知ったら、笑って済ませられるものではありません。そういう
1515 人には、少なくとも、哲学を担当することはやめてもらわなければ、今後何十年にもわたって、学生諸君や周囲に及ぼす影響は甚大です。まさか、教員がこのようなレベルで、日本でTop10の大学に入りたいたの、世界でTop100に入ることを目指すだの言って、茶番としか言いようがないでしょう。アッ！そうか、茶番だから笑うしかないわけですね。

1520 Q.2 権威というのは難しいものですね。配布された資料を読んで、以前渡してもらった哲学辞典の権威の項を思い出しました。でも、人間は間違ふものです。ニーチェのような物言いが出来る人は尊敬します。やるからには真面目にやらんと、と思いますが、どこまで頑張れるかは常に不安です。

A.2 もちろん、「人間は間違ふものです」から、資料にあったようなことをする教員は他にもいるでしょうし、その人個人としては、研究者として頑張ってもらえばよいのですが、問題はそのこと、
1525 つまり、その教員個人の責任（もさることながら）ではなくて、世の中には、件の教員のようなことは確実にしない、もっと學者として実力も業績もある人が存在するのに、何故、問題になっているような教員を採用したのか？という組織の問題なのです。具体的に言えば、資料の1.の例の教員と3.の誤訳の例の教員が、2.の重訳をしている教員を採用するという判断をしたのだらうと思います（というのは、私は、この人事に一切かかわっていないから）。そして、こういうレベルの1. 2. 3. のような教員たちが、また、おなじようなレベルの人を採用する、ということが問題なのです。そして、日本
1530 でTop10の大学に入りたいたの言うのであれば、教員がこのレベルではだめでしょう。と、いうより、学生諸君にとっても失礼だし、迷惑ではないですか。こういうことが起こるのは、一旦、能力のない人が人事を決める地位につくと、どんな組織でもありえることです。

1535 「無能者であるトップは、自己の保身と組織防衛のために、内外の有能者を拒絶・排除し、筋を通そうとする批判者を容赦なく摘み出す。無能かつ茶坊主的人物を周囲にはべらせ、寵を垂れ、後釜に据える。そしてその人間が、また同じことを繰り返す・・・」（竹田篤司『物語「京都学派」知識人たちの友情と葛藤』中公文庫、2012年、p. 30）

1540 これを読んだとき、うちの研究室のことじゃないか、と思いました。

Q.3 期末レポートについて、一笑に付していただき、最低の単位を頂戴できればと思ったのですが、
1545 たくさんのコメント書いて頂いたと聞き、とても恐縮しています。申し訳ありませんでした。今日の授業でも原典を原語で読むことや訳文を読む場合は複数の本を読まなければならないことの大事がよくわかりました。出来たら死ぬまでに、ドイツ語やギリシア語、ラテン語を学習してみたいと思いま

す。

A.3 レポートを読ませてもらって、60年以上前にはリアル・タイムに入門書として書かれたものが、今では、そのままでは理解されない古典になっていることに気付かされ、その点で、大変、勉強になりました。

1550

Q.4 原典を読むことの重要性については、先生の講義を受けて大分理解できたつもりだが、いざ論文を書く際に、自分で訳す場合も、かなり注意を要することがわかった。自分が無知であることを指摘してくれる他者がいてくれれば良いのだが、そうした他者の力をできるだけ借りることなく、自分自身で無知を悟る良い方法は何かありませんか。

1555

A.4 この場合、自分の無知といわれているのは、一般的に「自分は無知である」という自覚ではなくて、具体的に、論文を書いたり、翻訳をする際、自分ではこれでよいと思っているが、実は、専門家から見ると、あることを勘違いしていたり、あることを知らないために間違っていることを指しているのだから、やはり、自分とは違う知識、学殖をもった他人（友達や先輩や先生など）にみてもらって指摘してもらうしかなく、それが一番効率が良いのです。もちろん、自分自身でも、十代で書いたものを五十代になってから読んで間違いを訂正する、ということはあるかもしれませんが、大学4年間のうちにやろうとすると、ちょっと無理でしょう。ですから、授業や演習にできるだけ出席して、他の出席者や教員から指摘してもらうのがよいのです。ただし、その教員や大学・研究室などの学問的水準が実は問題なのだ、ということを経験した例は語っているわけです。私としては、諸君にもっと学問的にレベルの高い環境を提供しなければ申し訳ない、と思っています。

1565

Q.5 「あるもの（実在）」の説明を、I.1693～I.1694で説明しているのですが、一言「変化がない」と言えばいいものを、どうしてわざわざ分かりにくく説明するのかと思いました。1セメスター間ありがとうございました。

1570

A.5 どういたしまして。ひょっとすると、批判者・論敵の言い回しに合わせて言っているのかもしれない。

Q.6 アナクサゴラスの $\epsilon\nu\ \pi\alpha\nu\tau\iota\ \pi\acute{\alpha}\nu\tau\alpha$ と、エムベドクレスの「愛」と「争い」の間の状態は類似しているように思えるが、何らかの関連が考えられるか。

1575

A.6 時系列を考えれば、エムベドクレスのほうが古いので、エムベドクレスからアナクサゴラスへの影響がありえたかもしれないが、根本的に両者が違うのは、エムベドクレスでは、この世界の構成要素は四大（根）であるのに、アナクサゴラス自身の表現ではないけれども「同質素（ホモイオメレー）」であって、この点では違うということが言えます。むしろ、これらの構成要素にはたらきかける、エムベドクレスの「愛」と「争い」と、アナクサゴラスの、最初の一撃だけにせよ、ヌース（知性）に類似性があると言えるかもしれません。

1580

Q.7 レポートを書いていてふと思ったのですが、バルメニデスの言う理性による思考を失った状態と、心理学で習った鬱になりやすい思考は似ているなどと思いました。．．．（中略）．．．鬱の人は理性的な思考を失ってしまう傾向があるのかなと思いました。

1585

A.7 「破局的思考」については、私は何とも言えませんが、バルメニデスの「ノオス」（理性、知性）と「ノエイン」（理性・知性をはたらかせること）は、バルメニデス以降（例えば、プラトン）には、区別される、「（瞬間的な）直観的把握」と「（時間をかけての）計算・推理能力（悟性と後代に呼ばれる）」の両方が含まれているように思います。心理学の例では、後者に力点があるように思いますが、バルメニデスでは、むしろ、前者の方が重要であると思います。この点、十分に授業で扱えなかったのは申し訳ありませんでした。

1590